

萱田町川崎山遺跡

発掘調査報告

1979

八千代市遺跡調査会
八千代市

序 文

八千代市内の遺跡は、現在97ヶ所が確認され、内容は散布地・古塚・貝塚・塚・城址などで、そのうち、中・近世の塚が20ヶ所149基も確認され、県内市町村のうち1番多く分布しています。これら多くの埋蔵文化を抱え本市において、近年急激な開発の波が押し寄せ、その変貌は著しいものがあります。山林は切り開かれ、台地は削平され、赤土を露出し、谷は埋められ、清水は涸れ、地形は日増しに様相を変え、忽然と住宅が立ち並ぶ現状です。これらの開発によって、人々の生活水準を高め、社会の要求を実現させていく為に欠くことの出来ないと同様に、こうした目先の要求を満たすだけでなく、祖先から長い年月にわたって守り伝えられてきた掛けのない文化遺産を不注意な行為により失うことがないように、開発行為等の事前協議の会議に参加して、文化財の破壊を未然に防止するよう努力してまいりました。

今回、発掘調査した「萱田町川崎山遺跡」については、八千代市都市計画街路がこの遺跡上を通る為、県教育委員会・市教育委員会・市都市計画課の三者による協議により、記録保存の処置を講ずることになりました。

調査は八千代市遺跡調査会が受け、市文化財審議委員、村田一男氏の指導のもとに、平岡和夫氏が調査主任として現場で指揮をとられ、多くの成果を上げることが出来ました。

これらの成果をここに発掘調査報告書として上梓することが出来ました。本報告書が、各方面で広く活用され、八千代市の歴史を知る資料の一部となれば幸いです。

最後に、この調査に携わられた調査員各位に対し、厚く感謝申し上げるとともに、八千代市都市計画課をはじめ関係各位に対し、深甚なる謝意を表わす次第です。

昭和54年12月

八千代市遺跡調査会

会長 村 田 和 彦

(八千代市教育委員会教育次長)

例　　言

1. 本書は、千葉県八千代市市役所都市計画課が都市計画街路3・4・1号線建設工事に伴い、破壊されることになった埋蔵文化財の記録保存の為の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、八千代市市役所の委託を受け、千葉県文化課の指導のもとに組織された八千代市遺跡調査会が実施した。
3. 遺跡の所在地及び調査期間は以下の通りである。

千葉県八千代市董田町字川崎719

第1次調査（確認調査）

昭和54年3月11日～54年4月22日

第2次調査（本調査）

昭和54年5月22日～54年8月7日

4. 本書に係る遺物等の整理・図版の作成・執筆及び編集にあたっては、発掘担当者である平岡和夫・大賀健がおこない、根本時子・石井百々子・浅井葉子・石井洋子・丸静江・水落ヤエの協力を得た。
5. 本書の編集は、大賀が担当し平岡が総括を行なった。
6. 石器類・滑石製模造品等の材質鑑定は、千葉大学前田四郎氏に御教授を賜わった。
7. 調査に於いて、一部遺構が調査区外におよんだが、市教育委員会と地主の承諾を得て遺構全体を調査する事ができた。記して謝意を表わしたい。
8. 本調査の遂行にあたっては、下記の機関、諸氏に御指導・御協力を賜わった。記して感謝の意を表する。（敬称略）
千葉県教育委員会文化課・八千代市都市計画課・八千代市市民会館・西山太郎・鈴木道之助・中山吉秀・前田四郎
9. 地図は国土地理院5万分の1地図「佐倉」を用いた。

萱田町川崎山遺跡 目次

序 文

例 言

目 次

第 1 章、調査の経緯

第 1 節 調査に至る経過.....	(1)
第 2 節 調査の組織.....	(1)
第 3 節 調査の経過.....	(2)

第 2 章、遺跡の概観

第 1 節 遺跡の位置と考古学的環境.....	(6)
第 2 節 調査の方法.....	(7)
第 3 節 層序.....	(8)

第 3 章、遺構と遺物

第 1 節 各遺構と遺物

第 1 号住居址.....	(9)
第 2 号住居址.....	(11)
第 3 号住居址.....	(11)
第 4 号住居址.....	(13)
第 5 号住居址.....	(15)
第 6 号住居址.....	(29)
第 7 号住居址.....	(32)
第 1 号溝状遺構.....	(33)
第 2 号溝状遺構.....	(34)
第 1 号土塁.....	(35)
第 2 号土塁.....	(35)

第 2 節 グリッド出土遺物

59~62グリッド遺物集中区出土繩文式土器.....	(36)
グリッド内出土繩文式土器.....	(43)

グリッド内出土弥生式土器	(43)
その他グリッド内出土遺物	(43)
第4章 小考	(44)

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺地形図	(5)
第2図 造構配置図	(折込)
第3図 標準堆積土層模式図	(8)
第4図 第1号住居址実測図	(折込)
第5図 第1号住居址出土遺物実測図・拓影図	(10)
第6図 第2号住居址実測図	(12)
第7図 第3号住居址実測図	(13)
第8図 第4号住居址実測図	(折込)
第9図 第4号住居址出土遺物実測図・拓影図	(14)
第10図 第5号住居址実測図	(折込)
第11図 第5号住居址出土遺物実測図(1)	(16)
第12図 第5号住居址出土遺物実測図(2)	(17)
第13図 第6号住居址実測図	(折込)
第14図 第6号住居址出土遺物実測図	(31)
第15図 第7号住居址実測図	(折込)
第16図 第7号住居址出土遺物実測図	(32)
第17図 第1号溝、第2号溝実測図	(34)
第18図 59~62グリッド遺物集中区実測図	(36)
第19図 59~62グリッド遺物集中区出土縄文式土器実測図・拓影図	(39)
第20図 グリッド内出土縄文式土器実測図・拓影図	(40)
第21図 グリッド内出土弥生式土器実測図・拓影図	(40)
第22図 グリッド内出土その他の遺物実測図・拓影図	(40)
第23図 遺跡内出土石器実測図(1)	(41)
第24図 遺跡内出土石器実測図(2)	(42)

表 目 次

第1表 第5号住居址出土滑石一覧表(1).....	(18)
第5号住居址出土滑石一覧表(2).....	(19)
第5号住居址出土滑石一覧表(3).....	(20)
第5号住居址出土滑石一覧表(4).....	(21)
第5号住居址出土滑石一覧表(5).....	(22)
第5号住居址出土滑石一覧表(6).....	(23)
第5号住居址出土滑石一覧表(7).....	(24)
第5号住居址出土滑石一覧表(8).....	(25)
第5号住居址出土滑石一覧表(9).....	(26)
第5号住居址出土滑石一覧表(10).....	(27)
第2表 第6号住居址出土滑石一覧表.....	(30)

図 版 目 次

図版 1 遺跡写真 遺跡付近航空写真	
図版 2 遺跡写真 1 調査前状況	
2. グリッド設定状況	
図版 3 遺構写真 1. 第1号住居址確認状況	
2. 第1号住居址調査状況	
図版 4 遺構写真 1. 第1号住居址斐形土器出土状況	
2. 第1号住居址遺物出土状況	
3. 第1号住居址炉址調査状況	
4. 第1号住居址調査終了状況	
図版 5 遺構写真 1. 第2号住居址調査状況	
2. 第2号住居址調査終了状況	
図版 6 遺構写真 1. 第2号住居址柱穴断面 1, 2, 3	
2. 第3号住居址確認状況	
3. 第3号住居址調査終了状況	
図版 7 遺構写真 1. 第4号住居址確認状況	
2. 第4号住居址遺物出土状況	
図版 8 遺構写真 1. 第4号住居址遺物出土状況	
2. 第4号住居址調査状況	

3. 第4号住居址柱穴断面

図版9 遺構写真 1. 第5号住居址、第1号溝状遺構、第2号溝状遺構、確認状況

2. 第5号住居址調査状況

図版10 遺構写真 1. 第5号住居址勾玉出土状況

2. 第5号住居址玉出土状況

3. 第5号住居址高杯形土器出土状況

4. 第5号住居址、第1号溝状遺構終了状況

図版11 遺構写真 1. 第6号住居址調査状況

2. 第6号住居址炭化材出土状況

3. 第6号住居址粘土出土状況

図版12 遺構写真 1. 第6号住居址調査終了状況

2. 第6号住居址柱穴断面1、2、3、4

3. 第6号住居址貯藏穴断面

4. 第6号住居址貯藏穴断面

図版13 遺構写真 1. 第7号住居址遺物出土状況

2. 第7号住居址調査終了状況

図版14 遺構写真 1. 第1号溝状遺構、第2号溝状遺構、5号住居址、6号住居址、1号土

塙、調査終了状況

2. 第1号溝状遺構土層堆積状態

3. 第1号溝状遺構内滑石出土状況

図版15 遺構写真 1. 第5号住居址、第6号住居址、第7号住居址、第1号溝状遺構、第2

号溝状遺構、第1号土塙、第2土塙、調査終了状況

2. 第1号土塙土層堆積状態

3. 第1号土塙調査終了状況

図版16 遺構写真 1. 第2号土塙土層堆積状態

2. 第2号土塙調査終了状況

3. 59-62グリッド遺物集中区遺物出土状況

4. 59-62グリッド遺物集中区出土礫器

図版17 遺構写真 1. 59-62グリッド遺物集中区全景

2. 59-62グリッド先土器時代調査状況

図版18 遺構写真 1. 楔切状遺構（A-8）グリッド

2. 楔切状遺構（P-14）グリッド

図版19 遺物写真 第1号住居址出土遺物

- 図版20 遺物写真 第1号住居址出土遺物
- 図版21 遺物写真 第4号住居址出土遺物
第5号住居址出土遺物
- 図版22 遺物写真 第5号住居址出土遺物
- 図版23 遺物写真 第5号住居址出土遺物
- 図版24 遺物写真 第5号住居址出土遺物
- 図版25 遺物写真 第6号住居址出土遺物
- 図版26 遺物写真 第7号住居址出土遺物
- 図版27 遺物写真 59-62グリッド遺物集中区出土遺物
- 図版28 遺物写真 59-62グリッド遺物集中区出土遺物
- 図版29 遺物写真 1.59-62グリッド遺物集中区出土遺物
2.グリッド内出土遺物
- 図版30 遺物写真 1.グリッド内出土遺物（縄文式土器）
2.グリッド内出土遺物（弥生式土器）
- 図版31 遺物写真 グリッド内出土遺物
- 図版32 遺物写真 グリッド内出土石器
- 図版33 遺物写真 1.グリッド内出土滑石
2.グリッド内出土石器
- 図版34 遺物写真 1.第1号住居址出土斐形土器底部櫻庄痕
2.第6号住居址出土高杯形土器胎土中櫻混入状況
3.第7号住居址出土椀形土器櫻庄痕（外面底部、内面底部）

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

今回、実施した萱田町川崎山遺跡発掘調査は、八千代市萱田町字川崎山719番地に所在する八千代市都市計画街路3・4・1号線建設工事に伴うものである。この街路は新木戸、上高野線と称し、市内の新木戸と上高野を結ぶ路線で、国道296号線のバイパス的役割を果すものである。この建設工事は市の東側の上高野から進められ、その路線上には幾つもの遺跡が所在した。この為、昭和49年3月に村上供養塚を、昭和50年7~8月に村上古墳群の発掘調査が行なわれた。この様な事から今回の建設予定地についても、昭和50年9月に市都市部都市計画課より、市民会館南側の全長約400mの区間について、市教育委員会へ埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについての照会があった。現地踏査した結果、遺物の散布が見られ遺跡と断定し、又千葉県教育委員会に照会を行なったところ、当該地には周知の遺跡として登録されている萱田遺跡（八千代市遺跡番号65）が所在する旨の副申を得た。その後、三者により再三再四協議が重ねられ、この路線はすでに完成した部分もあり、路線変更も不可能な為、記録保存も止むを得ずとの結論が出た。しかし、その後この予定地の土地買収が難行したので、発掘調査は3年間延期された。昭和53年夏、土地買収の完了に伴ない都市計画課では、9月補正予算に確認調査委託料を計上した。だが、その後調査を引き受ける調査員が見つからず5ヶ月が過ぎ、翌年3月に至って調査の体制が整い、「八千代市遺跡調査会」が結成され確認調査が開始された。

後に、萱田地区区画整理事業内の遺跡名が萱田遺跡と重複する為、萱田町川崎山遺跡と改称した。

(木原)

第2節 発掘調査の組織

調査の主体、八千代市遺跡調査会

遺跡調査会

会長 村田和彦 八千代市教育委員会次長

調査委員 村田一男 千葉県立八千代高校教諭 日本考古学協会会員

清水盛人 八千代市社会教育課課長

平岡和夫 山武考古学研究所

調査主任 湖口淳一 (確認調査)山武考古学研究所調査研究員

平岡和夫 (本調査)

調査副主任 大賀 健 山武考古学研究所調査研究員

調査員 岡田 弘 山武考古学研究所調査研究員

三浦 収 山武考古学研究所調査研究員

補助調査員 岩沢茂好

発掘協力者（敬称略）

錦織圭吾 岩沢和夫 鈴沢不二夫 杉浦与市 鹿瀬 孝 鈴木 博 大木 守 鶴岡 俊
黒川 清 鈴木四郎 吉田 豊 堀越浩二 大江 稔 大草民生 広仲智之 鈴木延子 佐
瀬くに 斎藤みき 小山とり 錦織とよ 早野なか 豊田正子 曾根玲子 元橋節義 鈴木
圭子 鈴木正子 小川さだ 赤間秀雄

整理作業協力者

石井百々子 根本時子 浅野葉子 石井洋子 丸 静江 水落ヤエ 平岡龍子 中村竜三
東山靖生 小林弘之 鈴木弘幸

第3節 調査の経過

今回の調査は、昭和54年3月11日に道路計画区域内の遺構の概要を知る目的に、グリッド法による遺構確認調査に着手し、4月22日まで行なった。その結果、住居址7軒及び溝状遺構・土塙等を確認するに至った。その後5月22日より本調査を開始し8月7日に至る73日間にグリッドの拡張から遺構の発掘調査を実施した。調査区域内の一部（B地区）は宅地跡、市道に位置し、人力による表土排土は不可能な為に重機を利用した。また住居址の一部が発掘区域外にかかっているものの、都市計画課及び土地所有者の好意によって発掘を快諾された。

以下、調査の進行及び概要については発掘日誌により示すこととする。

発掘調査日誌妙

第1次調査（確認調査・昭和54年3月11日～4月22日）

昭和54年3月11日～3月15日

調査地区内の立木伐採・清掃作業。

3月16～18日

10m×10mのグリッドを設定し、その中に4m×4mの小グリッド設定する。

3月19日～27日

C地区よりグリッド調査を開始する。A・B（60～61）グリッドより住居址1軒を確認し、第1号住居址と命名した。

B地区はすでに住居址の一部が市民会館の入口に露出していること、また、宅地跡及び市道にかかる為に、一部のグリッドのみ確認調査を行なった。

4月1日～4月19日

A地区の調査を開始する。A・B・C・D（15～27）グリッド内より複数の溝を確認、いずれも溝は表土層中より堀り込みがみられた。また出土遺物等は検出できなかった。A・B（4～10）

グリッドより住居址3軒及び土塙2基を確認。A・B・C・D(6~12)グリッドより南北に流れる溝状遺構2本を確認した。

4月20日~4月22日

遺構の確認状態の写真撮影、及び堆積土層の実測、遺構配置図を作成し調査を終了する。

第2次調査(本調査、昭和54年5月22日~8月7日)

5月22日より確認調査の結果に基づき、遺構確認グリッドの拡張からプラン確認を行ない、遺構の本格的な調査を実施した。

5月22日~5月27日

工事予定によりC地区より調査を開始、第II層上面より繩文・弥生式土器が多く出土し、その地点を平板に記録する。第1号住居址プランを確認し写真撮影を行なう。

5月28日~6月1日

第1号住居址調査開始。拡張区第III層下より石器を数点検出した。ソフトローム層の調査開始。

6月2日~7日

第1号住居址覆土断面実測を行ない、その後出土状態の写真撮影、 $\frac{1}{2}$ の造り方実測を行なう。拡張区ではソフトローム中より石器類は検出されなかった。

6月8日~14日

B地区内の調査を開始。重機により表土の耕土作業を行なう。その後遺構確認作業に移る。

C D(43~50)グリッドで住居址3軒確認し、西側より第2号・第3号・第4号住居址と命名した。

6月15日~7月4日

第2号・第3号・第4号住居址の調査を開始する。各住居址いずれも出土遺物は少なく、18日に床面検出、20日に覆土の断面実測を行なう。25日より写真撮影、平板実測を行ない、完了した。

7月5日~16日

A地区の調査を開始。遺構確認地区の拡張作業を行なう。

7月17日~21日

A・B・C・D(15~27)グリッドの溝の調査を行なう。遺物は検出されなかった。A・B・C・D(4~12)グリッドより住居址3軒、東側よりプランを確認し第5号・第6号・第7号住居址と命名する。また溝2本、土塙2基も確認された。

7月22日~8月2日

第3号住居址は第1号溝によって切られている為に溝の調査を開始。第6号・第7号住居址も平行して調査を開始する。第6号住居址は火災を受けており、炭化物を検出した。29日第1号・第2号溝の調査を完了する。第5号住居址の調査を行なう。30日第6号・第7号住居

址の実測を開始する。第6号住居址は1%の遺り方実測、第7号住居址はすべて完了し、土塙
2基の調査を開始する。

8月4日～6日

A地区調査終了状況の写真撮影を終了し、すべての調査を終了する。



第1図 関連遺跡分布図

- 調査位置 A おおびた B 神野芝山古墳群 C 名主山
- D 村上 E 桑橋新田 F 蓼田椎現後 G 蓼田北海道 H 上ノ山古墳

第2章 調査の概観

第1節 遺跡の位置と考古学的環境（第1図、写真図版1）

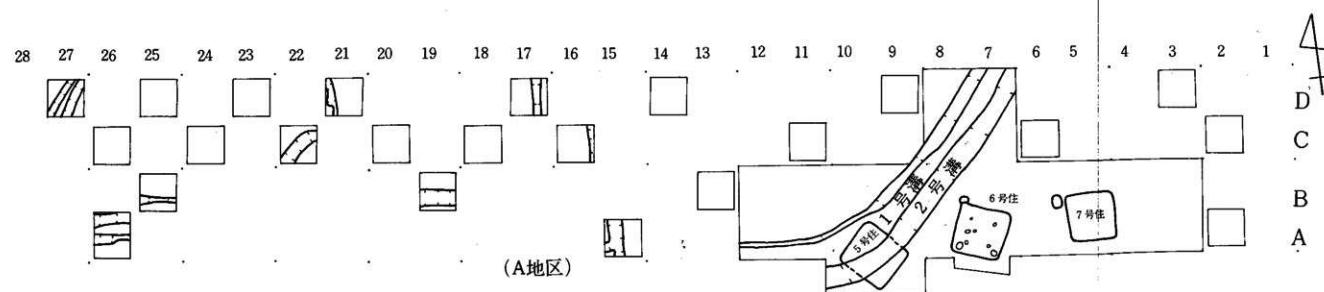
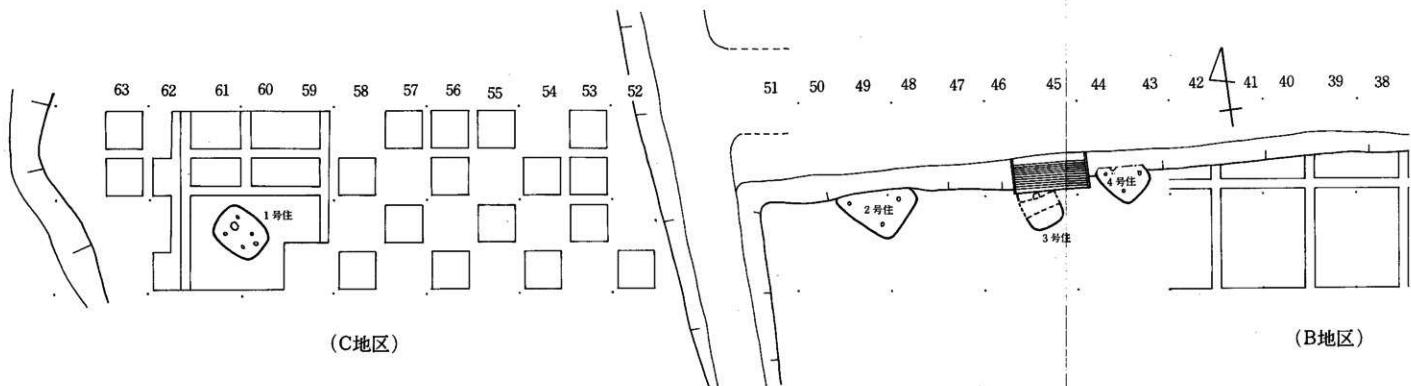
本遺跡の位置は印旛沼西南部に属し、西方の習志野原に連なる台地の東端部である。市内を南北に貫流する新川の小支谷が台地を樹枝状に侵蝕し、その谷津に面して遺跡の多数が展開している。本遺跡もその一つで、市民会館の北側から西南方向に小支谷があり、さらに300m南側にも同様に入りて東側は新川の本谷に接し、本谷と支谷に区画された台地先端にある。

本遺跡を筆者が遺跡として確認したのは、昭和47年に市民会館建設がはじまり、台地を削平した際であった。削平工事が完了したその断面には住居址の横断面がありありと2基もみられしかも西側の断面には焼土が露出していた。この住居址から南側一帯に土器片の散布がみられた。遺跡名は小字の川崎山であったが、都市化が進行しているこの地域にあって、あえて町名をとって「董田町遺跡」と名づけた。その際、No.65と与えた番号は『八千代市の歴史』の巻末の文化財分布図と表に明記し、「全国遺跡地図-12 千葉県」（文化庁文化財保護部）では12-964と登録されている。尚、調査は「董田遺跡」として行なわれたが、終了後、八千代市教育委員会より、県文化財センター発掘調査中の「董田遺跡」との混同を防ぐ為、報告書では「董田町川崎山遺跡」と改称するようにとの要請があり、「董田町川崎山遺跡」と改称した。

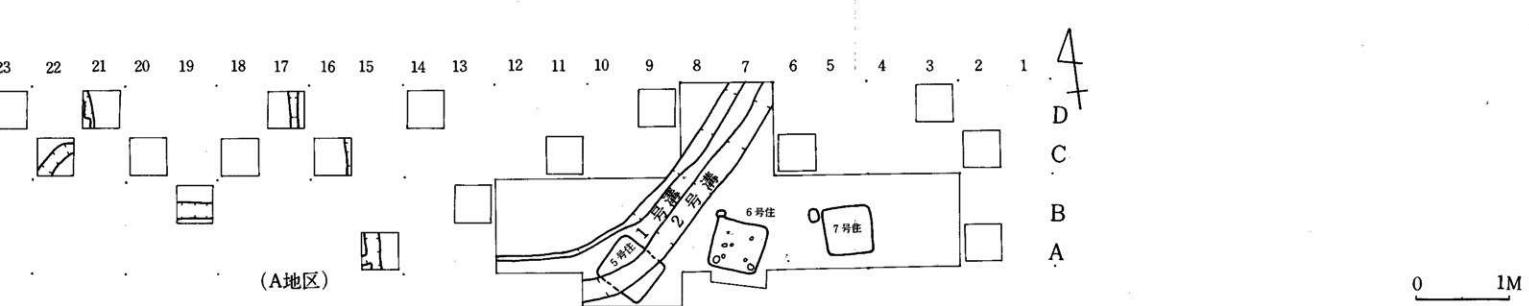
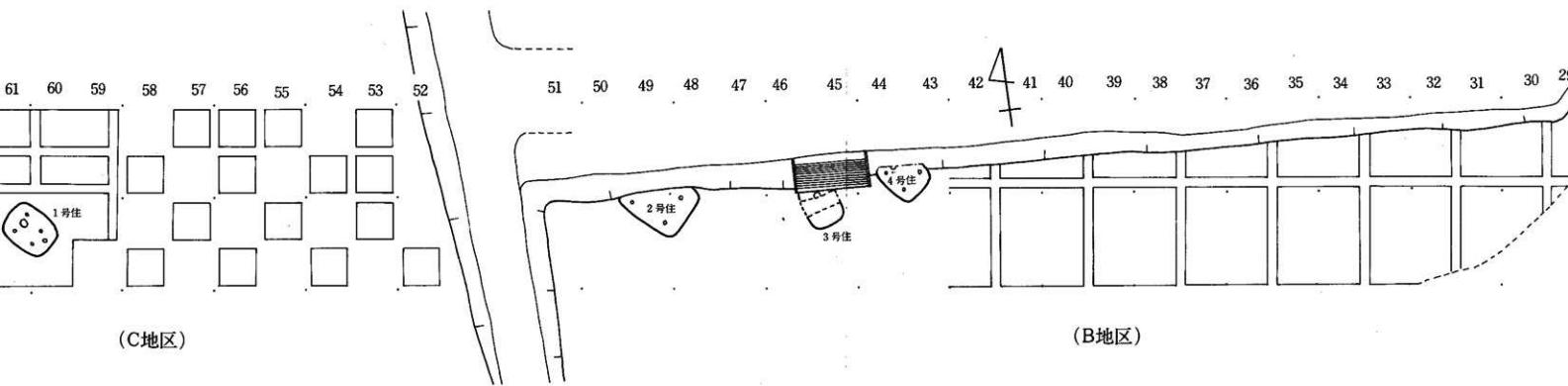
本遺跡の東側はおそらく村上正覚院のおしどり伝説に出てくる阿蘇沼の地であり、東南約500mの小舌状台地先端部には上ノ山古墳がある。また、北方には0.2~0.5kmにかけて董田遺跡（仮称、董田権現後、董田北海道）が展開し、区画整理に伴う埋蔵文化財発掘調査が大規模に行なわれている。現在市内では90ヶ所以上もの遺跡が確認されているが、その内容は多種多様であるので、そのうち本遺跡の参考となる遺跡を図示し、発掘調査結果から関連部分を列記して参考に供したい。

Aおおびた遺跡（弥生時代長岡期住居址1軒、古墳時代五領期住居址5軒、和泉期住居址1軒）、B神野芝山古墳群（2号古墳下から弥生時代長岡期住居址1軒）、C名主山遺跡（弥生時代久ヶ原期住居址1軒、平安時代国分寺倉庫、掘立建物址6軒）、D村上遺跡（弥生時代久ヶ原～弥生町期住居址14軒、奈良・平安時代真間期～国分寺期住居址155軒、掘立建物址24軒）、新川左岸に移って、E桑橋新田遺跡（弥生時代後期住居址2軒、方形周溝墓3基）、F董田権現後遺跡（仮称）（弥生時代後期住居址18軒、土塙1基、方形周溝墓2基、古墳時代住居址11軒、和泉期工房址4軒、奈良・平安時代真間期～国分寺期住居址58軒、高床式建物址9軒、土塙1基）^(注1)、G董田北海道遺跡（仮称）（古墳時代～平安時代鬼高期～国分寺期住居址約80軒、弥生式土器後期北関東系及び南関東系）^(注2)

以上7ヶ所の遺跡は、弥生式土器が北関東系と南関東系の土器が混入していることを示し、いわゆる「印旛・手賀沼系土器文化圏」にあるといえる。^(注3) このうち、Aおおびた遺跡は当



第2図 造構配図



市内で北関東系土器の存在を最初に確認できた遺跡である。E桑橋新田遺跡は方形周溝墓検出の最初である。F葦田権現後遺跡の和泉期の工房址は、本遺跡の北方1.5kmにあたり、立地条件も類似しているのできわめて好例といえる。

尚、本遺跡対岸の村上地区は『和名抄』にある郷名（村神郷）の推定地である。^(注4) 葦田は「葦田神保御厨」の地とされ^(注5)、また鎌倉・室町期には葦田郷として千葉氏支配下にあって香取神宮造営にあたっている。

(注1)、(注2) 第5～6回八千代市文化財調査会報告会資料より 1978～1979年

(注3) 丁寧県文化財センター 「研究紀要3」発生時代 1978年

(注4)、(注5) 齋木 勝、深沢克友 「岡良弼著『日本地理志料』

(村田一男)

第2節 調査の方法

調査当該地は、台地北側を東西に走る道路敷地内である為、幅20m長さ330mの発掘予定地内に10m×10mの大グリッドを設定した。

発掘調査の第1段階として、10m×10mの大グリッド内に4m×4mの小グリッドを4個設定し、千鳥方式で小グリッドを掘り下げ、遺構確認調査を実施した。次に第2段階として、遺構が確認された地区及び、遺物の多い地区を拡張し、調査を行なった。

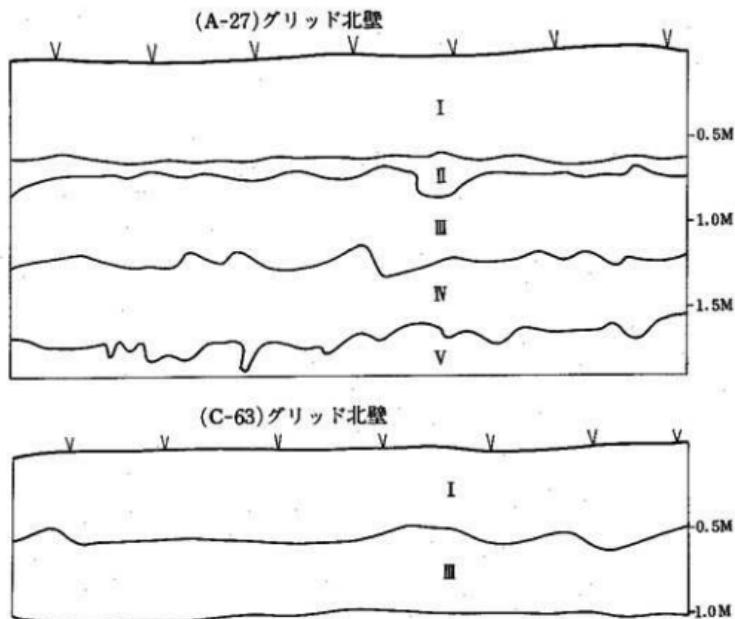
グリッドの名呼は、台地東側先端より西に1.2.3……65、南から北へA・B・C・Dと名命し確認調査を実施したが、道路工事の事情により、検出された遺構は、調査区西側より本調査を行なった。又、各遺構の名呼も、西側から名命した。

遺構本調査は、住居址は、十文字に土層観察の為のベルトを残し、四分法で調査を進めた。平面図、断面図等の実測図は、20分の1の縮尺実測を原則とし、特殊なものについては10分の1の縮尺による計り方実測を用いた。

土塙は2基検出されたが2基ともに第6号住居址及び第7号住居址と近接しており、調査は各住居址と平行して進めた。2基ともに半裁し、土層の堆積状況を観察した後、完掘して平面実測、写真撮影を行なった。第1号土塙は第6号住居址同様に縮尺10分の1の造り方実測を行い、第2号土塙は土層断面図、平面図併に20分の1の縮尺で実測を行なった。

溝状遺構は土層観察の為のベルトを7～8m間隔で設定し調査を行なった。土層断面実測図及び平面実測は20分の1の縮尺で行なった。

(平岡)



第3図 標準堆積土層模式図

第3節 層序

遺跡は台地北側の比較的平坦な面に位置し、遺跡内の中央部よりやや北西側に小支谷の緩やかな傾斜が見られる。また東側台地先端部付近でも同様な傾斜が見られる。土層の堆積状態は、全体にあまり大きな変化は認められず、台地の平端と傾斜面とでは堆積の状態はやや異なる。

層序は台地平坦面の(C-63)グリッドと、傾斜面の(C-53)グリッドの北壁を標準土層として示した。

第Ⅰ層 表土

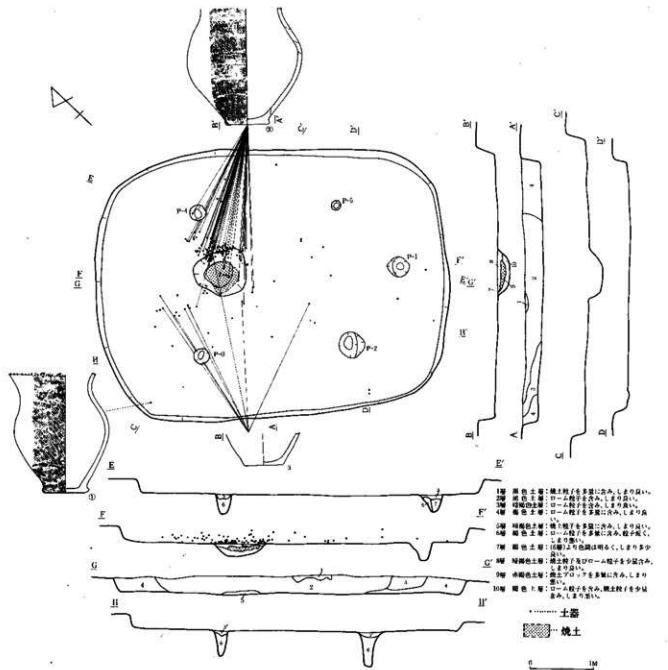
第Ⅱ層 黒色土、10cm前後の厚さをもち(B・C・D-52~55)グリッド付近の小支谷より部分的に堆積している。

第Ⅲ層 褐色土、40cm~55cmの厚さで堆積している。縄文時代から歴史時代までの遺物を包含する。

第Ⅳ層 黄褐色土 所謂ロームのソフトパートで45cm~50cmの厚さで堆積している。

第Ⅴ層 黄褐色土 ハードローム

(平岡)



第4図 第1号住居址実測図

第3章 遺構と遺物

第1節 各遺構と遺物

第1号住居址

遺構（第4図、写真図版3, 4）

当住居址はC地区（A-61, 62）（B-61, 62）各グリッドに於いて確認された。主軸をN-44°Wに持ち、558cm×429cmの隅丸方形を呈す。掘り込みは第III層上面より行なわれており、確認面より床面までの深さは、約30cmを計る。覆土は黒色土を基調とし、ローム土及び焼土の混入量により5層に分層した。壁はほぼ垂直に立ちあがる。壁溝は確認されなかった。柱穴は5本検出され、P-1, P-2, P-3, P-4は住居址対角線上に並び主柱穴と考えられるが、P-5は住居址主軸線上東壁寄りに位置し、柱穴となりうるか疑問がある。床面からの掘り込みの深さはP-1, 40cm P-2, 58cm P-3, 33cm P-4, 56cm P-5, 29cmを計る。床面は炉址を中心によく踏み固められているが、壁際は軟弱である。炉址は住居址長軸線上やや西壁寄りに位置する。プランは75cm×69cmの階円形で深さ20cmの鍋底状を呈す。充填土層は褐色土層及び焼土層となる。火床部はさほど焼けておらず、荒掘りを行なった後埋め戻しをし火床面としている。遺物は覆土中では炉址付近で細かく破碎した變形土器数個体及び、西壁コーナー寄りに床面密着状態で口縁部を欠損するがほぼ完形の變形土器（1）が出土している。

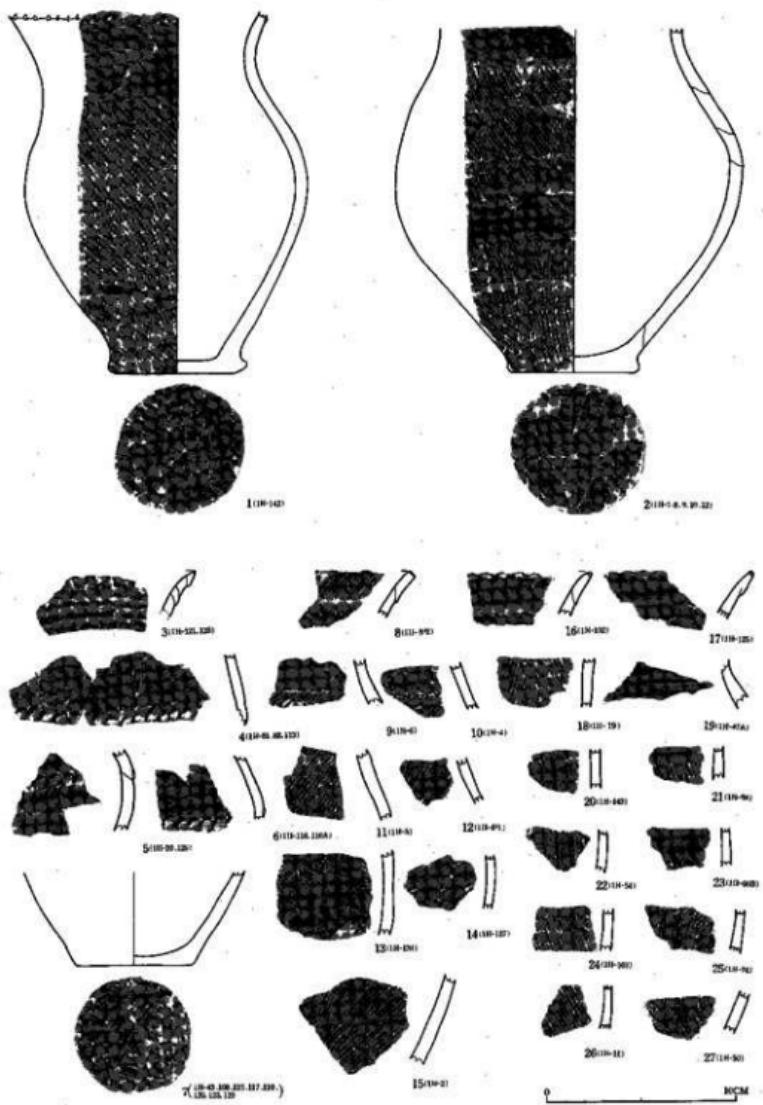
出土遺物（第5図、写真図版20）

1. 變形土器、残存高19.2cm、底径7.3cm、胴部最大直径15.0cm、頸部直径11.6cm、色調は外面はやや黄色の淡褐色を呈す。胎土は砂粒を多く含み焼成は良好である。底部は平底で胴部は下部より緩やかに内彎して立ちあがり頸部に至る。頸部は緩やかに外反する。口縁部は欠損している。底部には木葉痕が見られ、胴部には繩文が施されている。原体は4本燃りのLRで単節である。

2. 變形土器、残存高18.4cm、底径7.0cm、胴部最大直径18.4cm、色調は淡褐色を呈す。細く破碎しており、60片の細片を接合した。底部は平底で胴部は緩やかに内彎して立ちあがり、頸部で強く外反する。胎土は砂粒を多く含み焼成は良好である。底部には木葉痕が見られる。外面胴部は斜方向もしくは縱方向の燃糸文を施している。経状態の長さは2cm程の短いものである。頸部及び内面は横ナデを行なっている。

3～6. 變形土器、口縁から胴部にかけての破片で同一個体と思われる。器色は暗褐色を呈す。胎土は細い砂を多く含む。焼成は良好である。口縁部には輪積痕が見られ、口唇部には刻目を施している。胴部の接合部分にはヘラ若しくは指による刺突文がある。

7. 變形土器、底部の破片であり8片接合している。器色は暗褐色を呈す。胎土には砂粒を含み焼成は良好である。底部は平底で胴底痕がある。外面はヘラによる整形を行なっている。



第5図 第1号住居址出土遺物実測・拓影図

底部には板の圧痕が見られる。器面は二次焼成を受けており、部分的に剥離が見られる。

8, 9, 11, 12, 14, 15, 壺形土器、口縁から胴下部にかけての破片で同一個体と思われる。器色は赤褐色を呈す。胎土は精良で焼成良好である。口縁部は折り返えして段を持つ。外面頸部は無文であるがその他はRLの繩文を施している。

10. 壺形土器、頸部破片である。赤褐色を呈し胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。頸下部にRLの繩文を施しており無文帯との境に結節繩文を施している。

13. 壺形土器、胴下部の破片である。赤褐色を呈す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。外面にLRの繩文を施している。

16~27. 壺形土器、口縁から胴下部にかけての破片で同一個体と思われる。器色は灰褐色を呈す。胎土には砂粒を含み焼成は良好である。胴部には斜方向又は縱方向の撚糸文を施している。口縁折り返えし部には段を持ち口唇部は指による刻目を施している。

第2号住居址

遺構（第6図、写真図版5, 6）

当住居址はB地区（B-50, 51, 52)(C-50, 51, 52)各グリッドに於いて確認された。北側コーナーを中心に全体の寸が削り取られていた。この為住居址の全様を捉える事はできなかった。確認された3つのコーナーより推測すると、プランは長軸をN-46°-Wに持ち785cm×604cmの隅丸方形を呈すると思われる。当該区は第3号・第4号住居址併ども削平を受けており、住居址の掘り込み面を層位的に確認するに至っていない。住居址内の覆土は褐色土を基調とし、焼土及びローム土等の混入により11層に分層した。壁はほぼ垂直に立ちあがり床面までの深さは約70cmを計る。壁溝は無く床面は全体によく踏み固められているが、壁付近では幾分軟弱である。柱穴は3本検出され、3本伴に住居址対角線上に並ぶ。柱穴内充填土層はすべて自然堆積が見られ、住居廃棄時に柱の抜き取りが行なわれたことが推測される。床面からの深さはP-1, 73cm, P-2, 77cm, P-3, 64cmを計る。炉址は削り取られている。

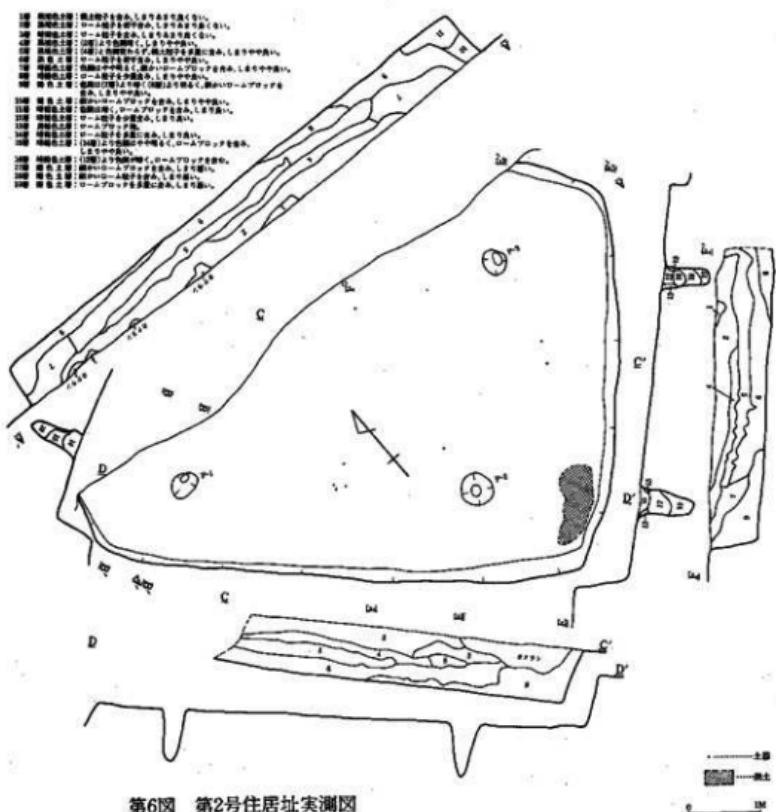
出土遺物

土器細片を検出しただけで複元及び実測は行なわなかった。いずれも壺形土器の頸部片である。

第3号住居址

遺構（第7図、写真図版6）

当住居址は第2号住居址の西側に位置し、B地区(B-47, 48)グリッドに於いて確認された。第2号及び第4号住居址同様北側を削り取られており、又、中央部を東西に溝状の擾乱を受けている為炉址及び東コーナー・南コーナーを確認するのみで、住居の詳細な規模及びプランの確認はなされていない。主軸はN-51°-Wに持ち、不整形の隅丸方形を呈すものと思われる。覆土は3層に分層され、黒色土を基調としロームの混入量により3層に分層した。確認面より

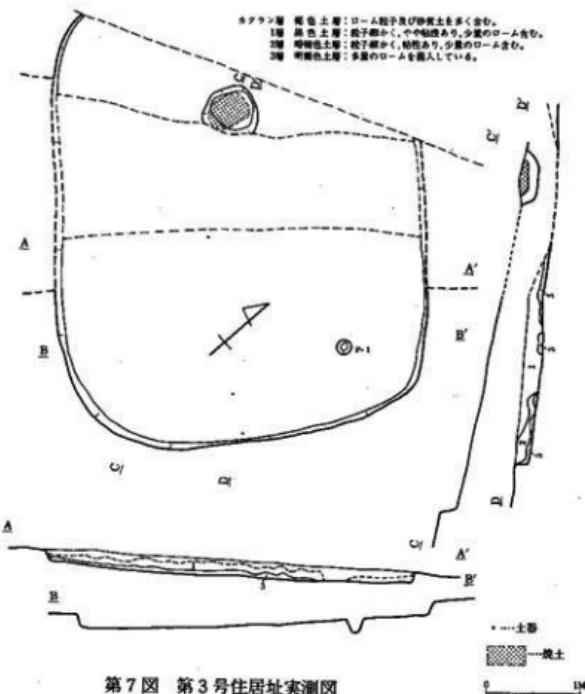


第6図 第2号住居址実測図

床面までの深さは約20cmと浅く、住居址の遺存状況は悪い。壁は南東側ではほぼ垂直に立ち上がるが南西側ではやや緩やかに立ちあがる。床面は全体に軟弱であり壁溝は持たない。柱穴は東側コーナー付近に於いて1本確認された。床面からの深さは15cmと浅く明瞭な柱穴ではない。炉址は住居址長軸上北西壁寄りに位置し、57cm×60cm、深さ15cmの不正形で鍋底状を呈す。南東部は溝状の擾乱によって破壊されている。遺物は南東壁付近に於いて2点小片が出土している。

出土遺物

土器細片が出土したのみで夔形土器胴部片1、底部片1である。

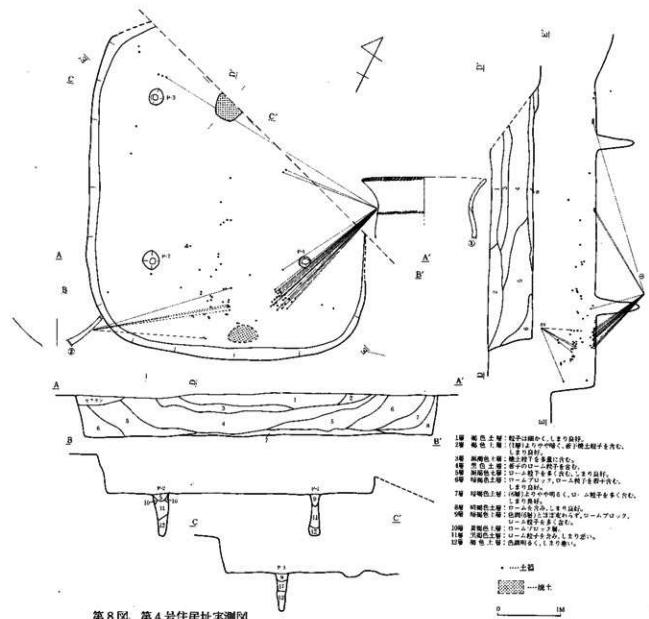


第7図 第3号住居址実測図

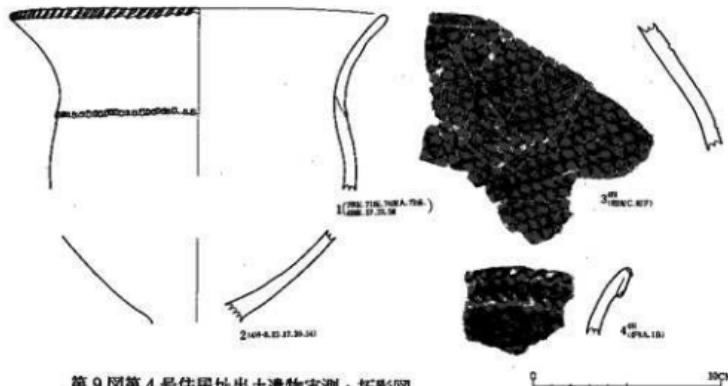
第4号住居址

遺構（第8図、写真図版7, 8）

当住居址は第3号住居址の西側に位置し、B地区（B-45, 46）(C-45, 46) 各グリッドに於いて確認された。北コーナーを中心に削り取られているが、3つのコーナー及び炉址は擾乱の難を逃がれている。主軸をN-24°-Wに持ち、525cm×440cmの隅丸方形を呈すると思われる。覆土はレンズ状の自然堆積を示しており、褐色土及び黑色土を基調に焼土、ローム、炭化物の混入により9層に分層した。確認面より床面までの深さは68cmを計り住居址の遺存状況は比較的良好であった。壁は全面ほぼ垂直に立ちあがる。床面は全体によく踏み固められており、特に炉穴付近は強固であり、壁際はやや軟弱である。壁溝は無く柱穴は住居址対角線上に3本検出した。北側コーナー付近にP-4が在ったものと考えられる。床面よりの深さは、P-1, 67cm, P-2, 69cm, P-3, 60cm, を計る。柱穴内充填土層はすべて自然堆積を示しており



第8図 第4号居住址実測図



第9図 第4号住居址出土遺物実測・撮影図

柱痕は認められなかった。炉址は住居址長軸線上やや北西壁寄りに位置しているが、北西側を削り取られており、その全様を捉えることはできなかった。プランは隋円形で皿状を呈すると思われる。充填土層は褐色土を基調とし、焼土及びローム土の混入により3層に分層した。火床部はよく焼けており、長期にわたって使用されたものと考えられる。遺物は覆土中、床着遺物とともに東南壁寄りに偏在して出土している。

出土遺物（第9図、写真図版7、8）

1、變形土器、頸部から口縁にかけての破片で16片接合している。器色は内面は褐色で外面は暗褐色を呈す。胎土は砂粒を含み焼成は良好である。胴部より緩やかに内脣し頸部で外反して大きく開き口唇部に至る。外面頸輪積痕の部分に箒状工具による刺突文を施している。口唇部には繩文原体の圧痕による刻目を施している。頸部は刷毛によるナデを行なっている。内面は縱若しくは斜め方向のナデを行なっている。

2、高杯形土器、上椀部片で口縁及び脚柱部は欠損しているが5片接合している。器色は褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み焼成は良好である。脚柱部接合部より上椀はほぼ直線的に開くものと思われる。外面体部は丹念なヘラ磨き内面は縱若しくは斜方向のナデを行なっている。

3、壺形土器、住居址西側コーナー付近に於いて床着状態で出土した。壺形土器の胴上部片で細く破碎している。胎土は砂粒を多く含み焼成も不良である。色調は外面赤褐色を呈し丹彩を施している。内面は褐色を呈す。外面は鋸齒状の区画文の内面にRL若しくはLRの羽状繩文を施している。

4、壺形土器、口縁部の破片で器色は黒色を呈す。胎土は砂粒を含むが焼成は良好である。頸部より緩やかに開く口縁である。口縁は折り返していて、口唇部及び折り返し部には繩文原体圧痕による刻目を施している。

第5号住居址

遺構（第10図、表-1 写真図版9）

当住居址はA地区（A-9, 10, 11）グリッドに於いて確認された。住居址中央部を南北に1号溝により切られており、溝の底部は住居址床面にまで達している。4つのコーナーは明確に検出された。プランは主軸をN-47°-Wに持ち、578cm×530cmの方形を呈する。住居の掘り込みは第2層上部より行なわれており、掘り込み面より床面までの深さは80cm～90cmを計る。覆土は黒色土を基調にし、ローム粒子及びロームブロックの混入により3層に分層される。壁は北西壁に於いてはほぼ垂直に立ち上がるが、その他の壁はやや緩やかに立ち上がる。壁構、柱穴は検出されていない。床面は全体に軟弱である。炉址は住居址長軸上北西壁寄りに位置し、床面に僅かに焼土の分布が見られるだけで掘り込みもなく、火床面もさほど使用された痕跡も認められず、居住期間が短期であった事が考えられる。遺物は第1層下部より第3層にかけて成品・未成品を含めた滑石が多量に出土している。これは住居址埋没時に西側コーナーより流れ込んだもので、白玉・勾玉・棗玉・有孔円板、剣形品等がある。土器は偏在する事なく出土しているが、すべて覆土中で、床面密着状態での土器は無い。

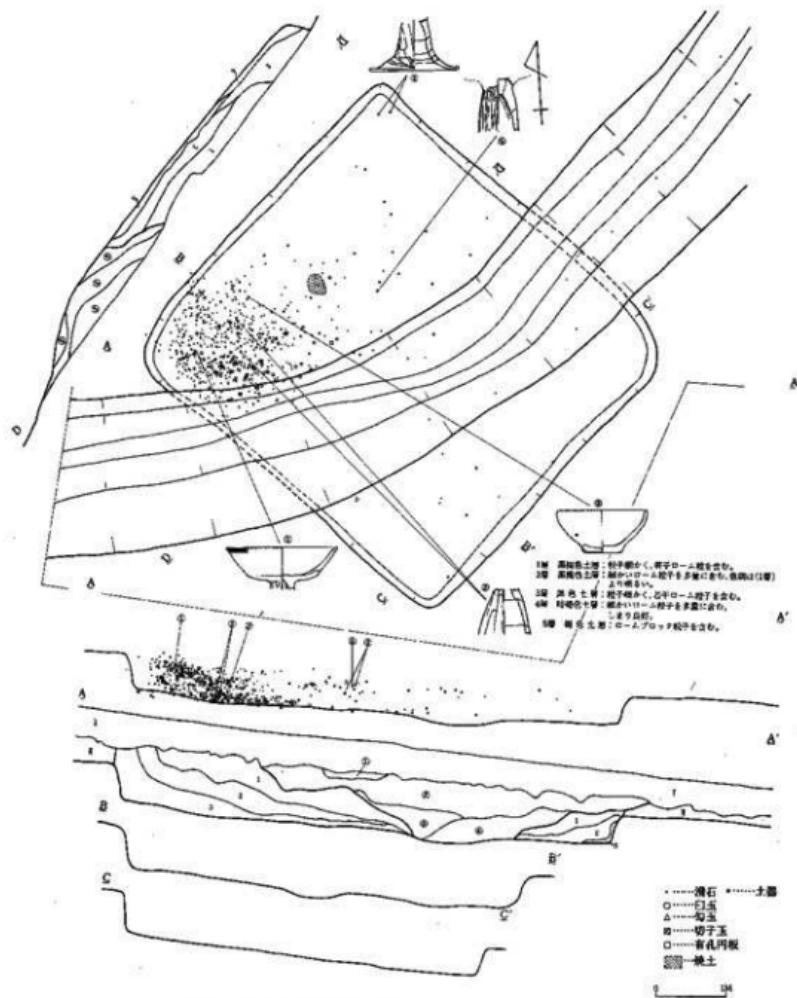
出土遺物（第11, 12図 写真図版21・22・23・24）

1、 楕形土器、器高6.1cm、口径12.7cm、底径5.5cm、色調は外面暗褐色、内面黒色を呈す。胎土は細い砂粒を含み、焼成良好である。口縁部を欠損しているが、底部及び体部は残っており、その器形は推測できる。底部は平板である。体部は緩やかに内彎して立ちあがり口縁に至る。整形は底部はヘラ削りによって削り出されており、外面体部は横若しくは斜めのヘラ削りを行なっている。内面は細いヘラ磨きの後、口縁付近は横ナデを行なっている。内面は黒色の光沢を有す。

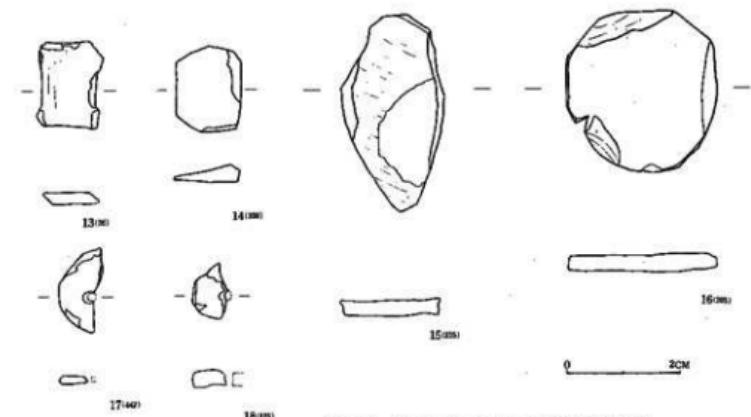
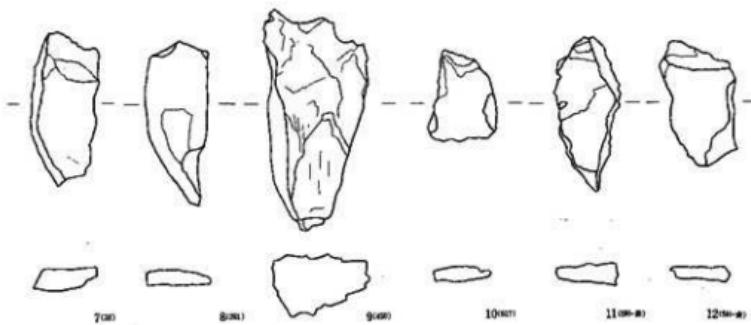
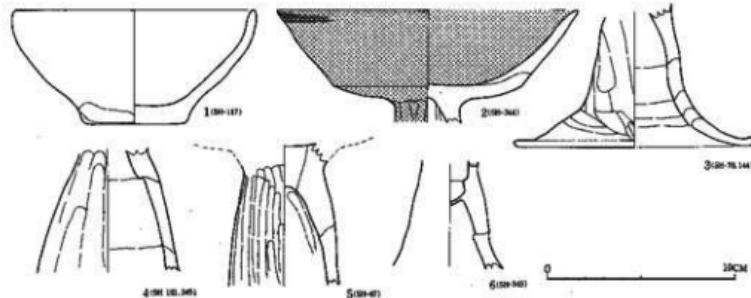
2、 高杯形土器、杯部のみで脚部は欠損しており口径16cmを計る。色調は内外両面に丹彩を施しており赤褐色を呈す。脚部内面には丹彩は見られず淡褐色を呈す。胎土は細い砂粒を含む。焼成は良好である。体部と後縁部の境に稜を有し、口縁は緩やかに外反する。整形は、体部はほぼ水平な板状を呈し、口縁はその上に取りつく。接合部分はヘラによる整形が行なわれている。口縁部は内外両面に横ナデを行なっている。

3、 高杯形土器、杯部は欠損している。底径13.0cm、色調は褐色を呈す。胎土は精良。焼成は良好である。脚柱部はほぼ直線的にふくらみ、底部は水平に開く。整形は、外面脚柱部は丹念な縱方向のヘラ磨き。底部は横ナデの後ヘラ磨きを行なっている。内面脚柱部は巻き上げの後指によりナデを行なっている。底部は横ナデ。

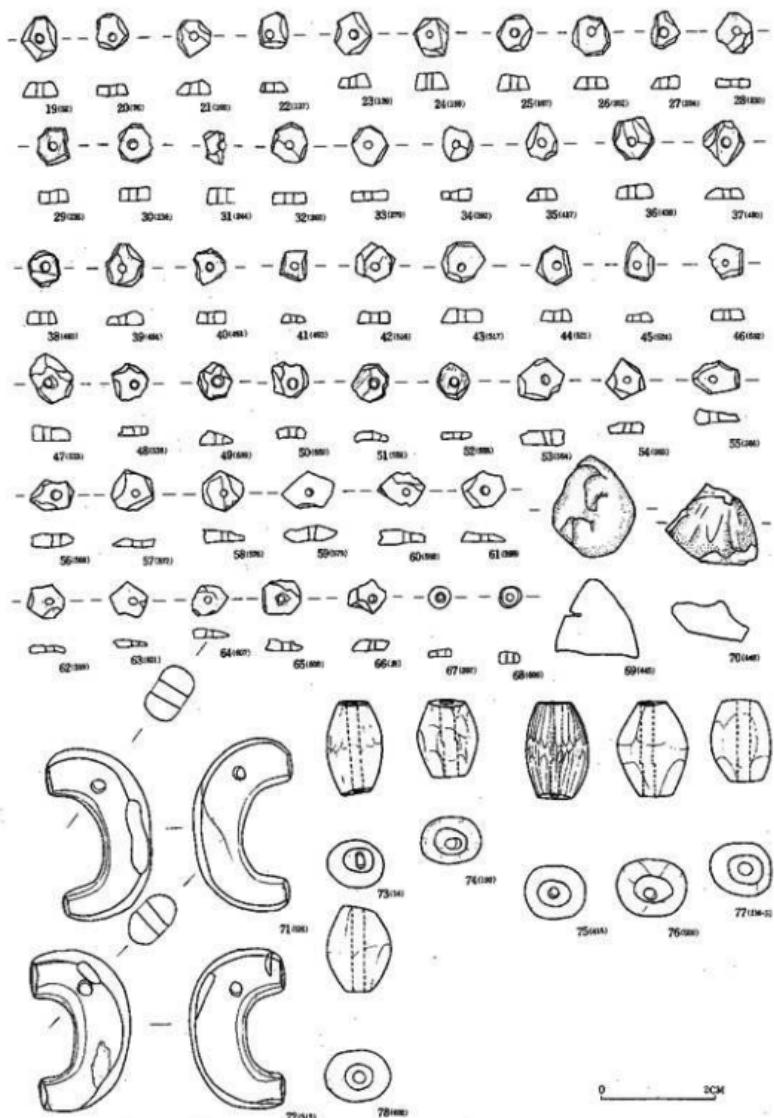
4、 高杯形土器、脚柱部である。器色は外面淡褐色、内面は黒色を呈す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。3よりもふくらみは緩やかで丸味を持つ。外面は縦方向のヘラ削り、内面は巻き上げの後横ナデを行なっている。



第10図 第5号住居址実測図



第11図 第5号住居址出土遺物実測図(1)



第12図 第5号住居址出土遺物実測図(2)

表1 第5号住居址出土滑石一覽表(1)

No.	遺物	分類	重さ	Fig. P.L.	No.	遺物	分類	重さ	Fig. P.L.
1	炭化物	剥片			32	滑石	(両面研磨)	2.2 g	7
2	滑石	"	0.35 g		33	"	剥片	0.2 g	
3	"	"	0.15 g		34	"	"	0.1 g	
4	"	"	0.1 g		35	"	"	0.15 g	
5	"	"	0.05 g		36	"	"	0.1 g	
6	"	"	0.01 g		37	土器	"		
7	" 2点	"	小0.1g 大0.2g		38	滑石	"	0.05 g	
8	炭化物				39	"	"	0.05 g	
9	滑石	剥片	0.1 g		40	"	"	0.1 g	
10	"	"	0.1 g		41	"	"	0.03 g	
11	"	"	0.2 g		42	"	"	0.25 g	
12	"	"	0.05 g		43	"	"	0.1 g	
13	炭化物				44	"	"	0.55 g	
14	滑石	玉未完成品	2.05 g	73	45	"	白玉未完成品(形削)	0.2 g	
15	"	剥片	0.1 g		46	"	剥片	0.05 g	
16	"	"	0.1 g		47	石	河川石	0.1 g	
17	"	"	0.1 g		48	炭化物			
18	"	"	0.2 g		49	滑石	剥片	0.3 g	
19	"	"	0.1 g		50	石	"	0.05 g	
20	"	"	0.05 g		51	滑石	鞋石	0.11 g	
21	"	"	0.15 g		52	"	白玉未完成品(穿孔削)	0.18 g	19
22	"	"	0.2 g		53	"	剥片	0.15 g	
23	"	"	0.2 g		54	土器	"	0.1 g	
24	"	"	0.02 g		55	"			
25	"	"	0.15 g		56	滑石			
26	"	(両面研磨)	0.7 g	13	57	土器	剥片	0.18 g	
27	"	剥片	0.1 g		58	"			
28	"	"	0.08 g		59	"			
29	"	"	0.1 g		60	"			
30	"	"	0.2 g		61	滑石	剥片	0.1 g	
31	"	"	0.05 g		62	土器			

表1 第5号住居址出土滑石一覧表(2)

No.	遺物	分類	重さ	Fig P.L	No.	遺物	分類	重さ	Fig P.L
63	土器				95	滑石	剥片	0.01 g	
64	滑石	剥片	0.05 g		96	"	"	0.05 g	
65	土器				97	"	"	0.1 g	
66	"				98	"	"	0.08 g	
67	"	(実測)			99	"	"	0.2 g	
68	"				100	"	白玉未成品(穿孔済)	0.12 g	21
69	"				101	"	剥片	0.07 g	
70	"	No.144と接合 (実測)			102	"	"	0.01 g	
71	滑石	剥片	0.15 g		103	"	"	0.1 g	
72	"	"	0.08 g		104	"	"	0.02 g	
73	"	"	0.02 g		105	"	"	0.05 g	
74	"	"	0.01 g		106	"	"	0.2 g	
75	"	"	0.1 g		107	"	"	0.1 g	
76	"	白玉未成品(穿孔済)	0.12 g	20	108	"	"	0.07 g	
77	"	剥片	0.02 g		109	"	"	0.05 g	
78	"	"	0.08 g		110	"	"	0.1 g	
79	"	"	0.02 g		111	"	"	0.01 g	
80	"	"	0.01 g		112	"	"	0.02 g	
81	"	(片面研磨)	0.2 g		113	"	"	0.14 g	
82	"	剥片	0.01 g		114	"	"	0.1 g	
83	"	"	0.18 g		115	"	"	0.07 g	
84	"	"	0.15 g		116	"	"	0.05 g	
85	"	"	0.02 g		117	土器	(実測)		
86	"	"	0.03 g		118	滑石	剥片	0.05 g	
87	"	"	0.15 g		119	"	"	0.1 g	
88	"	"	0.08 g		120	石	河原石	0.05 g	
89	"	"	0.07 g		121	滑石	剥片	0.1 g	
90	"	"	0.05 g		122	"	"	0.03 g	
91	"	"	0.04 g		123	"	"	小0.03	
92	"	"	0.03 g		124	"	"	小0.03	
93	"	"	0.06 g		125	"	"	大0.05 g	
94	"	"	0.15 g		126	"	"	0.65 g	
								0.3 g	15
								0.01 g	

表1 第5号住居址出土滑石一覧表(3)

No	遺物	分類	重さ	Fig P., L.	No	遺物	分類	重さ	Fig P., L.
127	土器				159	滑石	剥片	0.1 g	
128	滑石	剥片	0.1 g		160	"	"	0.1 g	
129	"	"	0.05 g		161	"	"	0.02 g	
130	"	"	0.25 g		162	"	"	0.15 g	
131	土器				163	"	"	0.01 g	
132	"				164	"	"	0.03 g	
133	"				165	"	"	0.08 g	
134	"				166	"	"	0.01 g	
135	滑石	剥片	0.01 g		167	"	"	0.005 g	
136	"	"	0.09 g		168	"	"	0.03 g	
137	"	"	0.1 g	22	169	"	"	0.09 g	
138	"	"	0.2 g		170	"	"	0.01 g	
139	"	白玉未成品(穿孔済)	0.13 g	23	171	"	"	0.15 g	
140	"	剥片	0.08 g		172	"	"	0.03 g	
141	"	"	0.02 g		173	土器			
142	"	"	0.05 g		174	滑石	剥片	0.03 g	
143	"	"	0.02 g		175	土器			
144	土器	No.70と接合 (尖洞)			176	滑石	剥片	0.08 g	
145	滑石		0.01 g		177	"	"	0.15 g	
146	"	"	0.05 g		178	"	"	0.005 g	
147	"	"	0.07 g		179	"	"	0.08 g	
148	"	"	0.01 g		180	"	"	0.02 g	
149	"	"	0.18 g		181	土器	(実測)		
150	"	"	0.005 g		182	滑石	剥片	0.02 g	
151	"	"	0.01 g		183	"	"	0.01 g	
152	"	"	0.08 g		184	"	"	0.15 g	
153	"	"	0.02 g		185	"	"	0.4 g	
154	"	"	0.08 g		186	"	"	0.005 g	
155	"	"	0.05 g		187	"	白玉未成品(穿孔済)	0.19 g	25
156	"	"	0.37 g		188	"	剥片	0.05 g	
157	"	"	0.09 g		199	"	"	0.12 g	
158	"	白玉未成品(穿孔済)	0.2 g	24	190	"	棗玉完成品	1.7 g	74

表1 第5号住居址出土滑石一覽表(4)

No.	遺物	分類	重さ	Fig P.L	No.	遺物	分類	重さ	Fig P.L
191	滑石	剥片	0.17 g		223	滑石	剥片	0.05 g	
192	"	"	0.05 g		224	"	"	0.02 g	
193	"	"	0.09 g		225	"	"	0.08 g	
194	石	輕石	小0.005 大0.01 g		226	"	"		
195	滑石	剥片	0.18 g		227	"	"	小0.1 大0.15 g	
196	土器				228	"	"	0.08 g	
197	滑石	剥片	0.03 g		229	"	"	0.03 g	
198	"	"	0.25 g		230	"	白玉未成品(穿孔薄)	0.09 g	28
199	"	"	0.01 g		231	"	剥片	0.1 g	
200	"	"	0.08 g		232	土器	剥片		
201	"	(荒削)	1.2 g		233	滑石	剥片	0.01 g	
202	"	白玉未成品(穿孔薄)	0.15 g	26	234	"	白玉未成品(破片)	0.02 g	
203	"	剥片	0.2 g		235	"	白玉未成品(穿孔薄)	0.15 g	29
204	"	白玉未成品(穿孔薄)	0.08 g	27	236	"	剥片	0.38 g	
205	"	有孔凹板未成品	4.5 g	16	237	"	"	0.05 g	
206	土器				238	"	白玉未成品(穿孔薄)	0.15 g	30
207	滑石	剥片	0.09 g		239	"	剥片	0.03 g	
208	"	"	0.08 g		240	"	"	0.1 g	
209	"	"	0.08 g		241	"	"	0.4 g	
210	"	"	0.05 g		242	"	"	0.05 g	
211	"	"	0.08 g		243	"	"	0.1 g	
212	"	"	0.5 g		244	"	白玉未成品(穿孔薄)	0.08 g	31
213	"	"	0.2 g		245	"	剥片	0.15 g	
214	土器				246	"	"	0.15 g	
215	滑石	劍形未成品	2.7 g	15	247	"	"	0.1 g	
216	"	剥片	0.15 g		248	"	"	0.07 g	
217	"	"	0.08 g		249	"	"	0.18 g	
218	"	"	0.15 g		250	"	"	0.05 g	
219	"	"	0.08 g		251	"	"	0.3 g	
220	"	"	0.05 g		252	"	"	0.3 g	
221	"	"	0.95 g		253	"	"	0.05 g	
222	土器				254	"	"	0.09 g	

表1 第5号住居址出土滑石一覽表(5)

No.	遺物	分類	重さ	Fig P., L	No.	遺物	分類	重さ	Fig P., L
255	滑石	剥片	0.09 g		287	滑石	剥片	0.1 g	
256	"	"	0.08 g		288	"	"	0.2 g	
257	"	"	0.3 g		289	"	"	0.06 g	
258	"	"	0.1 g		290	"	"	0.75 g	
259	"	"	0.05 g		291	"	"	0.05 g	
260	"	白玉未成品(穿孔流)	0.1 g	32	292	"	"	0.15 g	
261	"	剥片	0.2 g		293	"	"	0.08 g	
262	土器				294	"	白玉未成品(穿孔流)	0.18 g	
263	"				295	土器			
264	"				296	滑石	剥片	0.08 g	
265	"				297	土器			
266	滑石	剥片	0.07 g		298	滑石	剥片	0.1 g	
267	"	"	0.02 g		299	"	"	0.1 g	
268	"	"	0.08 g		300	土器			
269	"	"	0.02 g		301	滑石	剥片	0.48 g	
270	"	"	0.8 g		302	"	"	0.09 g	
271	"	"	0.05 g		303	"	"	0.2 g	
272	"	"	0.13 g		304	"	"	0.08 g	
273	"	"	0.08 g		305	"	"	0.1 g	
274	"	"	0.08 g		306	"	"	0.03 g	
275	"	"	0.09 g		307	"	"	0.1 g	
276	"	"	0.09 g		308	"	"	0.25 g	
277	土器				309	"	"	0.05 g	
278	滑石	剥片	0.05 g		310	"	"	0.27 g	
279	"	白玉未成品(穿孔流)	0.15 g	33	311	"	"	0.1 g	
280	"	剥片	0.15 g		312	"	"	0.02 g	
281	"	"	1.05 g		313	"	"	0.08 g	
282	土器				314	"	"	0.005 g	
283	"				315	"	"	0.09 g	
284	滑石	剥片	0.02 g		316	"	"	0.07 g	
285	"	"	0.02 g		317	"	"	0.05 g	
286	"	"	0.07 g		318	"	"	0.08 g	

表1 第5号住居址出土滑石一覽表(6)

No.	遺物	分類	重さ	Fig. P., L.	No.	遺物	分類	重さ	Fig. P., L.
319	滑石	剝片	0.05 g		351	滑石	剝片	0.01 g	
320	"	"	0.15 g		352	"	"	0.05 g	
321	"	"	0.1 g		353	"	"	0.08 g	
322	"	"	0.15 g		354	"	"	0.05 g	
323	"	"	0.01 g		355	"	"	0.09 g	
324	"	"	0.02 g		356	"	"	0.08 g	
325	"	"	0.05 g		357	"	"	0.02 g	
326	"	"	0.02 g		358	土器	"	0.05 g	
327	土器				359	滑石		0.2 g	
328	"				360	"	剝片	0.01 g	
329	滑石	剝片	0.2 g		361	"	"	0.25 g	
330	"	"	0.1 g		362	"	"	0.03 g	
331	"	"	0.03 g		363	"	"	0.03 g	
332	"	"	0.28 g		364	"	"	0.09 g	
333	"	"	0.05 g		365	"	"	0.13 g	
334	"	"	0.09 g		366	"	"	0.1 g	
335	"	"	0.1 g		367	"	"	0.005 g	
336	"	"	0.9 g		368	"	"	0.1 g	
337	"	"	0.15 g		369	"	"	0.2 g	
338	土器				370	"	"	0.02 g	
339	"				371	"	"	0.25 g	
340	"				372	"	"	0.08 g	
341	滑石	剝片	0.06 g		373	"	"	0.18 g	
342	"	"	0.27 g		374	"	"	0.01 g	
343	土器				375	"	"	0.01 g	
344	"				376	"	"	0.1 g	
345	"				377	"	"	0.19 g	
346	滑石	剝片	0.03 g		378	"	"	0.29 g	
347	"	"	0.05 g		379	"	"	0.05 g	
348	"	"	0.03 g		380	"	"	0.03 g	
349	"	"	0.01 g		381	"	"	0.05 g	
350	"	"	0.06 g		382	"	"	0.3 g	

表1 第5号住居址出土滑石一覽表(7)

No.	遺物	分類	重さ	Fig P., L	No.	遺物	分類	重さ	Fig P., L
383	滑石	白玉未成品(穿孔済)	0.1 g		415	滑石	素玉完成品	3 g	75
384	"	剥片	0.08 g		416	"	剥片	0.1 g	
385	"	"	0.08 g		417	"	"	0.12 g	35
386	"	"	0.02 g		418	"	"	0.1 g	
387	"	"	0.4 g		419	"	"	0.5 g	
388	"	"	0.08 g		420	"	"	0.1 g	
389	"(2袋有)	"	0.05 0.35 g		421	"	"	0.05 g	
390	"	"	0.15 g		422	"	"	0.01 g	
391	"	"	0.18 g		423	"	"	0.15 g	
392	"	白玉未成品(穿孔済)	0.1 g	34	424	"	"	0.05 g	
393	"	剥片	0.05 g		425	"	"	0.4 g	
394	"	"	0.28 g		426	"	"	0.02 g	
395	"	"	0.02 g		427	"	"	0.05 g	
396	"	"	0.4 g		428	"	"	0.03 g	
397	"	白玉完成品	0.03 g	67	429	土器			
398	"	剥片	0.05 g		430	"			
399	"	(両面研磨)	1 g	14	431	"			
400	"	剥片	0.2 g		432	"			
401	"	"	0.15 g		433	"			
402	欠番				434	"			
403	滑石	剥片	0.18 g		435	"			
404	"	(両面研磨)	0.3 g		436	"			
405	"	"	0.1 g		437	"			
406	"	"	0.01 g		438	滑石	剥片	0.01 g	
407	"	"	0.02 g		439	"	白玉未完成品(穿孔済)	0.01 g	36
408	"	"	0.01 g		440	"	剥片	0.22 g	
409	"	"	0.01 g		441	"	"		
410	"	"	0.05 g		442	"	有孔円板半欠	0.1 g	17
411	"	"	0.1 g		443	土器		0.35 g	
412	炭化物				444	"			
413	滑石	剥片	0.07 g		445	石英		2.35 g	
414	"	"	0.05 g		446	滑石	剥片	0.05 g	

表1 第5号住居址出土滑石一覽表(8)

No.	遺物	分類	重さ	Fig P., L	No.	遺物	分類	重さ	Fig P., L
447	土器		1.01 g		479	滑石	剥片	0.02 g	
448	石	輕石	0.45 g	70	480	"	白玉未成品(穿孔済)	0.13 g	37
449	土器				481	"	剥片	0.03 g	
450	滑石	荒割	8.9 g	9	482	"	"	0.09 g	
451	"	剥片	0.2 g		483	"	白玉未成品(穿孔済)	0.1 g	38
452	"	"	0.05 g		484	"	剥片	0.18 g	39
453	"	"	0.15 g		485	"	"	0.2 g	
454	"	"	0.08 g		486	"	"	0.08 g	
455	"	"	0.1 g		487	"	"	0.12 g	
456	"	"	0.09 g		488	"	"	0.1 g	
457	"	"	0.06 g		489	"	"		
458	"	"	0.06 g		490	"	"	0.12 g	
459	"	"	0.15 g		491	"	白玉未成品(穿孔済)	0.1 g	40
460	"	"	0.38 g		492	"	剥片	0.1 g	
461	"	"	0.35 g		493	"	白玉未成品(穿孔済)	0.06 g	41
462	"	"	0.05 g		494	"	剥片	0.25 g	
463	"	"	0.08 g		495	"	"	0.2 g	
464	"	"	0.15 g		496	"		0.09 g	
465	"	"	0.38 g		497	土器			
466	"	"	0.08 g		498	"			
467	"	"	0.03 g		499	"			
468	"	"	0.05 g		500	滑石	玉完成品	3.32 g	76
469	石	(河原石)	0.05 g		501	"	剥片	0.06 g	
470	滑石	剥片	0.1 g		502	土器			
471	"	"	0.28 g		503	"			
472	"	"	0.03 g		504	滑石	剥片	0.25 g	
473	"	"	0.2 g		505	土器			
474	"	"	0.2 g		506	"			
475	"	"	0.03 g		507	"			
476	"	"	0.02 g		508	"			
477	"	"	0.85 g		509	"			
478	"	"	0.1 g		510	"			

表1 第5号住居址出土滑石一覧表(9)

No.	遺物	分類	重さ	Fig. P., L	No.	遺物	分類	重さ	Fig. P., L
511	土器				543	"	"	0.08 g	
512	滑石	剥片	0.07 g		544	土器			
513	"	"	0.8 g		545	"			
514	"	"	0.45 g		546	"			
515	"	勾玉完成品	3.85 g	72	547	"			
516	"	白玉未完成品(穿孔済)	0.15 g	42	548	滑石	剥片	0.09 g	
517	"	"	0.22 g	43	549	"	白玉未完成品(形割り)	0.15 g	
518	"	剥片	0.09 g		550	"	"(穿孔済)	0.12 g	50
519	"	"	0.1 g		551	"	"	0.1 g	51
520	"	"	0.09 g		552	"	剥片	0.2 g	
521	"	白玉未完成品(穿孔済)	0.12 g	44	553	"	"	0.1 g	
522	"	剥片	0.05 g		554	"	"	0.1 g	
523	土器				555	"	白玉未完成品(穿孔済)	0.08 g	52
524	滑石	白玉未完成品(穿孔済)	0.05 g	45	556	"	剥片	0.29 g	
525	"	剥片	0.15 g		557	"	"	0.08 g	
526	"	"	0.2 g		558	"	"	0.1 g	
527	"	"	0.08 g		559	土器			
528	"	"	0.05 g		560	"			
529	"	"	0.03 g		561	"			
530	土器				562	滑石	白玉未完成品(形割り)	0.09 g	
531	滑石	剥片	0.15 g		563	土器			
532	"	白玉未完成品(穿孔済)	0.1 g	46	564	滑石	白玉未完成品(穿孔済)	0.3 g	53
533	"	"	0.26 g	47	565	"	"	0.2 g	54
534	"	剥片	0.3 g		566	"	"	0.2 g	55
535	"	"	0.06 g		567	土器			
536	"	"	0.06 g		568	滑石	白玉未完成品(穿孔済)	0.12 g	56
537	"	"	0.1 g		569	土器			
538	"	白玉未完成品(穿孔済)	0.12 g	48	570	"			
539	"	"	0.1 g	49	571	"			
540	"	剥片	0.1 g		572	滑石	白玉未完成品(穿孔済)	0.18 g	57
541	"	"	0.03 g		573	土器			
542	滑石	剥片	0.09 g		574	土器			

表1 第5号住居址出土滑石一覽表(10)

No.	遺物	分類	重さ	Fig. P., L	No.	遺物	分類	重さ	Fig. P., L
575	滑石	剥片	0.15 g		607	"		0.1 g	64
576	"	白玉未成品(穿孔済)	0.18 g	58	608	"	"	0.2 g	65
577	土器				609	"	剥片	1.28 g	
578	滑石	剥片	0.52 g		610	"	"	0.005 g	
579	"	白玉未成品(穿孔済)	0.2 g	59	611	"	"	0.05 g	10
580	"	剥片	0.05 g		612	土器			
581	"	白玉未成品(穿孔済)	0.1 g		613	"			
582	土器				614	"			
583	滑石	剥片	0.15 g		615	滑石	剥片	0.02 g	
584	"	"	0.05 g		616				
585	"	"	0.15 g		617	滑石	(片面研磨)	0.6 g	
586	"	"	0.06 g		618	"	剥片	0.02 g	
587	"	"	0.1 g		619	"	"	0.35 g	
588	"	"	0.08 g						
589	"	"	0.1 g						
590	"	"	0.03 g						
591	"	"	0.07 g						
592	"	白玉未成品(穿孔済)	0.2 g	60	種認面	滑石	勾玉完成品	4.05 g	71
593	土器								
594	滑石	剥片	0.6 g						
595	土器								
596	滑石	剥片	0.12 g						
597	"	"	0.05 g						
598	"	白玉未成品(穿孔済)	0.15 g	61					
599	"	"	0.1 g	62					
600	"	剥片	0.05 g						
601	"	白玉未成品(穿孔済)	0.09 g	63					
602	"	素玉完成品	2.2 g	78					
603	"	剥片	0.25 g						
604	"	"	0.09 g						
605	"	"	0.38 g						
606	滑石	白玉完成品	0.08 g	68					

5、高杯形土器、脚柱部。縱方向に少しだけ破碎している。器色は外面淡褐色、内面は黒色を呈す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。3と同様脚柱部はやや直線的に開く。外面は縱方向の細いヘラ削り。内面はヘラにより縱方向のナデを行なっている。杯部との接合部にホゾを入れている。

6、高杯形土器 脚柱部。器色は外面淡褐色、内面は黒色を呈す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。脚柱部はあまりふくらみを持たず直線的である。外面は縱方向のヘラ磨き内面は巻き上げの痕跡が見られる。杯部との接合部はホゾの部分から割れており、ホゾが離れた部分は円錐状の中空になっている。

7~12 滑石 研磨等の加工痕は見られない。

13~14 滑石 両面に研磨痕が見られる。13は側面の研磨は行なわれていない。14は側面の研磨も行なわれており、有孔円板の未成品とも考えられる。

15 滑石 剣形模造品（未成）鋒部に鎬をもたない偏平な剣形品である。孔はもたない。両面及び側面の研磨も雑であり、未成品である。

16~17~18 滑石 有孔円板未成品 16は孔は無い。両面及び側面に研磨は雑である。17、18は穿孔時もしくはその後に割れたと考えられる。いずれも研磨は雑で不完全である。

19~66 滑石、白玉未成品、五角形から八角形に形割りされている。穿孔は両面研磨の後ほぼ中央に片方より一度に穿たれている。側面の研磨は行なわれていない。

67~68 滑石、白玉完成品、全面よく研磨されており、断面形は67は68に比べ偏平で、68はやや丸味を持つ。

69~70 駒石、いずれも加工の痕は見られない。

71~72 滑石、勾玉完成品、71は住居址確認時排土中に検出されたもので出土地点層位が明確でない。ここでは覆土中出土として取り扱った。背は緩やかな曲線を描くが、腹はやや「コ」の字状を呈す。断面は偏平にちかい階円形を呈す。穿孔は一方より行なわれており、全面丹念に磨かれている。

73~78 滑石、棗玉完成品、各個とも微妙な差があるが、研ぎ出しの時に胴中央部に稜を持つ、やや切子玉の様相を呈す74~76~78と、所謂、棗玉様を呈すもの73~75~77の2種がある。研磨は前者が稜を意識的に研ぎ出している反面、後者はより滑らかな曲線の研ぎ出しを行なっている。穿孔は一方からと二方からの2種類みられ、74~75~76は、両面より穿孔したため貫通時にずれを生じている。

出土した滑石の総数は600点余りで量的にさほど多くはないが、勾玉・棗玉をはじめ、白玉剣形、有孔円板と種類も多い。勾玉・棗玉に関しては未完成の出土はなかった。ここでは詳細な分析は避け、後章に譲る事にする。

第6号住居址

造構（第13図、表-2 写真図版11・12）

当住居址は、A地区（A-7, 8）グリッドに於いて確認された。546cm×510cmのほぼ正方形を呈す。長軸はN-67°-Wに持つ。住居の掘り込みは第II層上部より行なわれている。確認面より床面までの深さは約50cmを計る。覆土は黒色土を基調とし、ローム及び焼土の混入により7層に分層できた。尚、当住居址は火災を受けており多量の炭化物を出土している。壁は南側でやや緩やかに立ち上がるが、他はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は全周しており、床面下7～10cmを計る。壁溝内充填土層は褐色土を基調とし、ローム土を多量に混入する土層でしまりが悪い。柱穴は4本検出された。床面からの深さはP-1, 64cm, P-2, 61cm, P-3, 75cm, P-4, 84cm, P-5, 75cm, P-6, 84cmを計る。柱穴充填土層は褐色土層を基調とするが、P-1, P-2, P-3, 各柱穴に於いては黒色の柱痕が断面に観察された。床面は住居中央部でアーバ状に硬質部が広がっている。炉址は住居址長軸西壁寄りに2基確認された。F-1は76cm×39cmの不正円形を呈し、床面下11cmを計る浅い皿状を呈す。充填土層は黒色土及び褐色土を基調として焼土の混入により4層に分層できた。火床面はよく熱を受けておりロームはボロボロになっている。F-2はF-1の東側に位置し長径39cm短径26cmの階円形を呈す。床面下7cmの浅い皿状を呈す。充填土層は焼土層と褐色土層の2層に分層される。火床面はあまり熱を受けておらず軟弱である。南東コーナー及び南西コーナーに2基の貯蔵穴P-5, P-6が検出された。P-5は73cm×70cmのほぼ円形で北側、住居中央に向って緩やかなテラスを持つ。床面からの深さは60cmを計る。充填土層は褐色土を基調とし、炭化物、ロームの混入により5層に分層できた。P-6は87cm×67cmの階円形を呈す。掘り込みは漏斗状で二段に掘り込んでいる。床面からの深さは55cmを計る。充填土層は褐色土を基調とし、炭火物、焼土、ロームの混入により5層に分層できた。土器は南東付近に集中して出土しているが完成品は無く破片のみである。北東コーナー付近に於いて滑石の剥片が50点床面に集中して出土しているが、研磨の痕が見られるのは2片のみで、他は加工の痕跡は見られない。住居が火災を受けている為床面全体に焼土の分布が見られ、炭化材が多く検出された。特に西壁側に於いては遺存状態が良く格子状に組み合せているのが確認できた。東壁寄りP-5付近に一塊の白色粘土が床着で出土している。

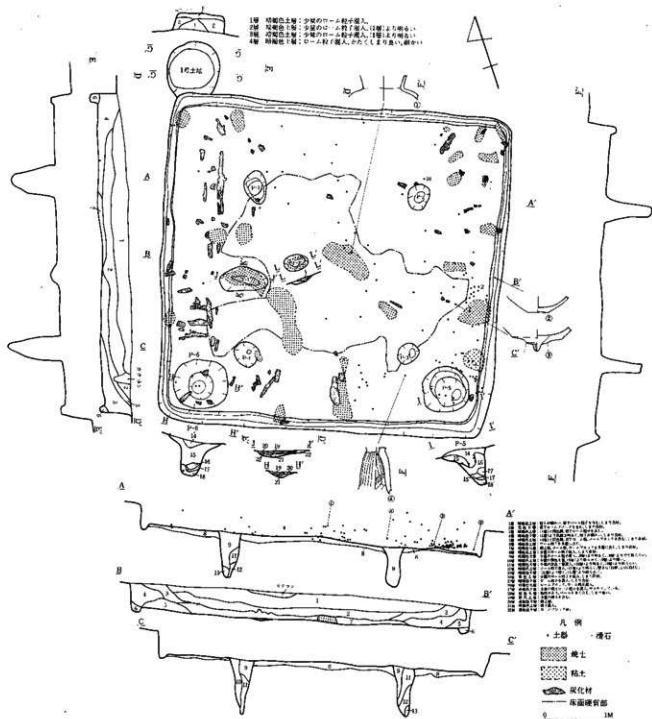
出土遺物（第14図 写真図版25）

1. 高杯形土器　杯部、器色は褐色を呈す。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。体部と口縁の境に棱を持つ。外面体部に焼成後の傷がある。砥石様の目的に使用されたものと考えられる。内外面に剥離が激しく器面の調整は不明瞭である。脚部との接合部にホゾ状の突起が残っている。

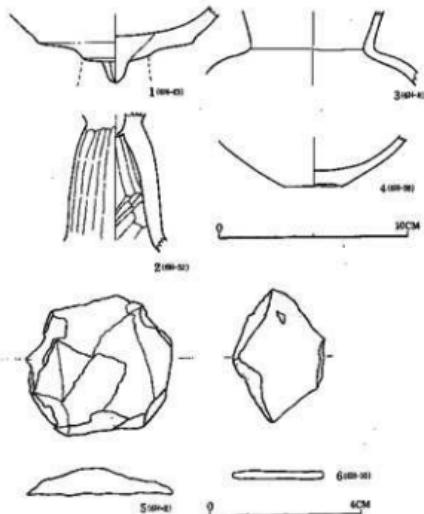
2. 高杯形土器　脚部、器色は褐色を呈す。胎土は精良で焼成は良好である。脚柱部は接合部から緩やかにふくらむ。外面は縱方向のヘラ磨き、内面は縱もしくは斜方向のヘラ削りを行

表2 第6号住居址出土滑石一覧表

No.	遺物	分類	重さ	Fig P., L	No.	遺物	分類	重さ	Fig P., L
1	滑石	剥片	0.32 g		32	滑石	剥片	0.45 g	
2	"	"	0.25 g		33	"	"	0.09 g	
3	"	"	0.2 g		34	"	"	0.32 g	
4	"	"	0.35 g		35	"	"	0.38 g	
5	"	"	0.45 g		36	"	"	0.3 g	
6	"	"	0.09 g		37	"	"	0.12 g	
7	"	"	0.15 g		38	"	"	0.19 g	
8	"	"	0.15 g		39	"	"	0.15 g	
9	"	"	0.2 g		40	"	"	0.1 g	
10	"	"	0.12 g		41	"	"	0.05 g	
11	"	"	0.2 g		42	"	"	0.05 g	
12	"	"	0.09 g		43	"	"	0.02 g	
13	"	"	0.09 g		44	"	(両面研磨)	0.09 g	
14	"	"	0.45 g		45	"	剥片	0.05 g	
15	"	"	0.1 g		46	"	"	0.25 g	
16	"	片面研磨	0.08 g		47	"	"	0.1 g	
17	"	剥片	0.05 g		48	"	"	0.08 g	
18	"	"	0.1 g		49	"	"	0.05 g	
19	"	"	0.06 g		50	"	"	0.08 g	
20	"	"	0.03 g						
21	"	"	0.1 g						
22	土器								
23	滑石	剥片	0.17 g						
24	"	"	0.22 g						
25	"	"	0.18 g						
26	"	"	0.18 g						
27	"	"	0.28 g						
28	"	"	0.1 g						
29	"	"	0.27 g						
30	"	"	0.2 g						
31	"	"	0.18 g						



第13図 第6号住居址実測図



第14図 第6号居住址出土遺物実測図

痕が見られる。

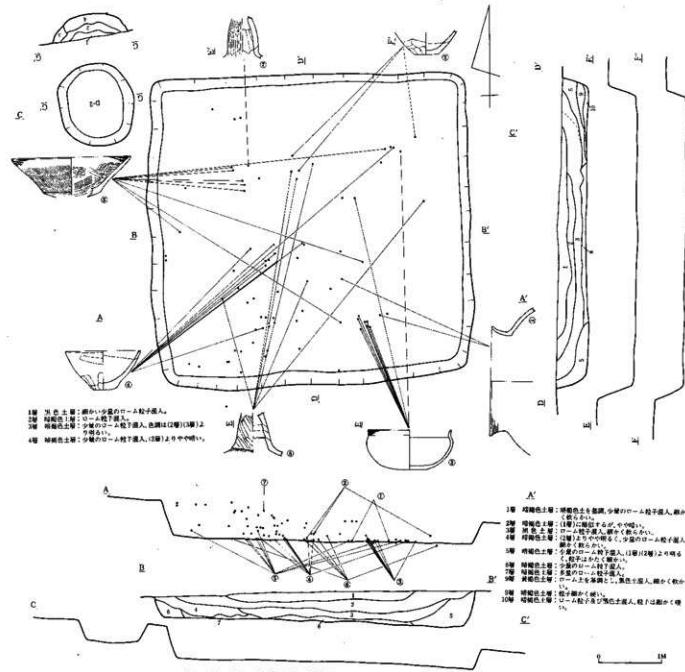
5. 滑石 有孔円板未成品 覆土上層出土。亀甲状に形割りを行なっている。研磨は見られない。

6. 滑石 薄い板状を呈し両面伴によく研磨されている。側面は研磨していない。覆土中出土他床面より50点の滑石剥片が出土しているがこれは一覧表（表2）にした。

なっている。杯部との接合部はホゾが差された円錐状の穴になっている。

3. 塚形土器 頸部折り返し部破片、器色は褐色を呈す。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。緩やかに彎曲する胴部は頸部で鋭く外反し口縁に至る。外面の整形は横ナデの後細いヘラ磨きを行なっている。内面は、口縁は細いヘラ磨き、胴部は横位のヘラ削りを行なっている。

4. 变形土器 底部、小形変形土器の底部で、円形の底部は上床気味である。胴部は内側して立ち上がり球状になるとと思われる。色調は内面赤褐色、外面褐色を呈す。胎土には細い砂粒を含む。焼成は良好である。整形は内外面伴にヘラ削りを行なっている。底部には指による圧



第15図 第7号住居址実測図

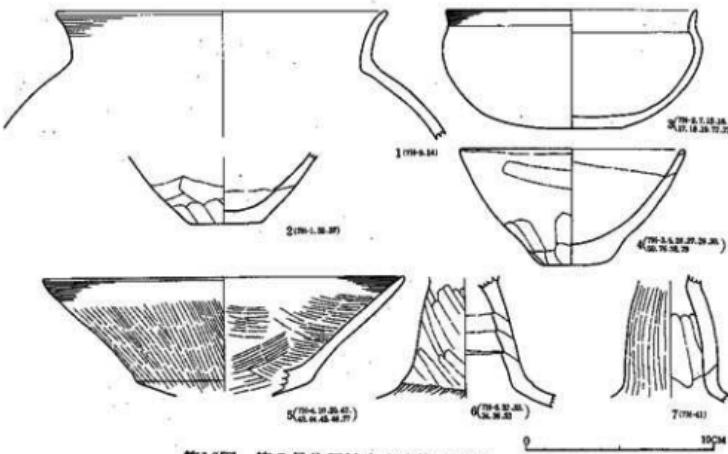
第7号住居址

遺構（第15図 写真図版13）

当住居址は(A-5)(A-6)グリッドに於いて確認された。511cm×494cmのはば正方形を呈す。長軸はN-91°-Wではば東西に持つ。住居の掘り込みは第II層上部より行なわれている。確認面より床面までの深さは、深い所で58cm、浅い所で32cmを計る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址覆土は暗褐色土を基調とし、10層に分層した。壁溝、柱穴、炉址等の内部施設は確認されていない。床面は全体に軟弱である。遺物は覆土中、床面全体に出土している。床面から高杯形土器(5, 6)、楕形土器(3)、小形鉢形土器(4)、菱形土器(1, 2)等が出土している。

出土遺物（第16図 写真図版26）

1. 菱形土器 口縁部、2片接合、口径は17.5cmを計る。器色は褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。緩やかに内側する胸部は頸部で緩やかに升反して口縁に至る。整形は、外面胴部はヘラ削りの後荒いヘラ磨キを行なっている。口縁は横ナデ。内面は継若し



第16図 第7号住居址出土遺物実測図

くは横方向のヘラ削りを行なっている。

2. 小型壺形土器 底部、6片接合、底径は3.8cmを計る。器色は暗褐色。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。平底である。内面は輪積みの後ヘラによる整形を行なっている。

3. 梱形土器 11片接合しており、少欠損している。口径13.4cm、器高6.3cmを計る。器色は褐色を呈す。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。底部は平底であるが体部との明確な境はない。体部は球形を呈し、口縁部は僅かに外反して立ち上がる。全体にヘラによる整形を行なっており、外面底部及び内面底部に稜の圧痕が見られる。

4. 小型針形土器 12片接合している。口径12.0cm、器高6.2cm、底径4.6cmを計る。褐色を呈し、胎土には細い砂粒を含む。焼成は良好である。底部はやや丸味を持ち安定が悪い。体部は僅かに内脇気味に立ち上がる。整形は内外面にヘラ削りを行なっており、口縁部には輪積みの痕が見られる。

5. 高杯形土器 10片接合している。脚部及び接合部を欠損する杯部。器色は外面は暗褐色、内面は褐色を呈す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。体部と口縁の境に核を存し口縁は外反して開く。内外面に口縁部は刷毛により整形しており、口唇部は横ナデを行なっている。

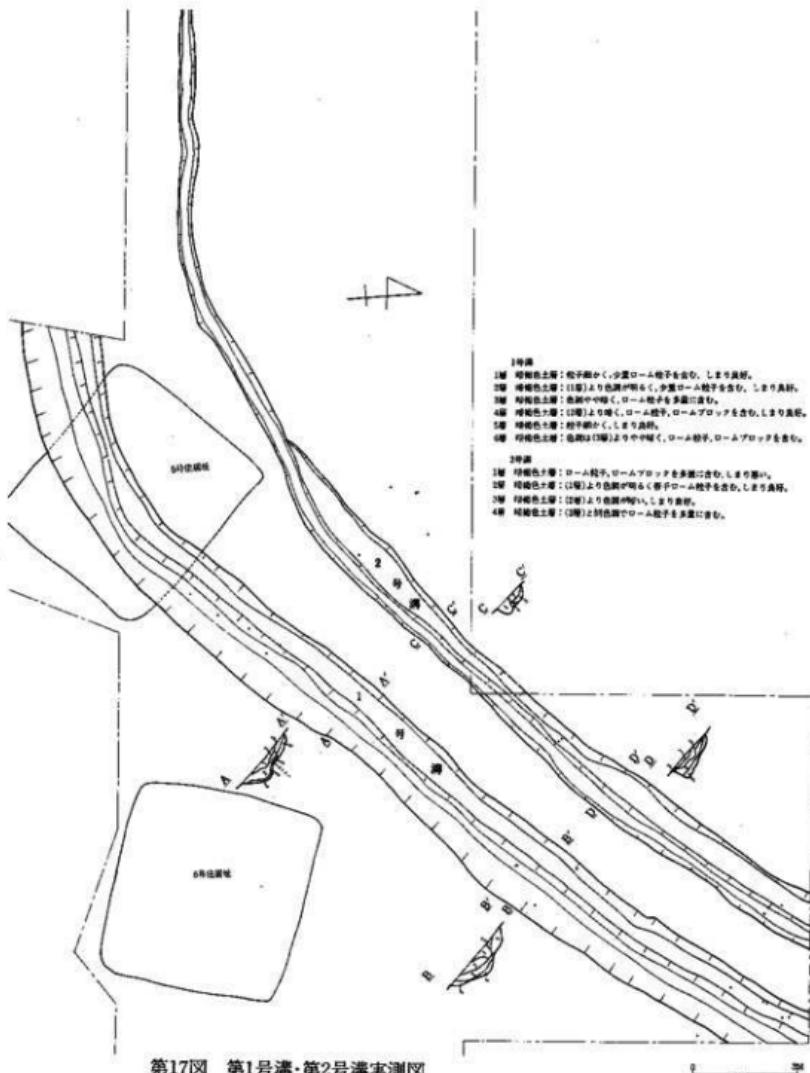
6. 高杯形土器 脚部で6片接合している。杯部及び裾部は欠損している。器色は褐色を呈す。胎土は精好で、焼成は良好である。脚柱部はあまりふくらみを持たず直線的に開き、裾部で鋭く折れて水平に開く。内外面に巻き上げの痕跡が見られるが、内面は特に著しい。

7. 高杯形土器 脚柱部片、杯部及び裾部は欠損している。器色は褐色を呈す。胎土は細い砂粒を多く含む。焼成は良好である。脚柱部は円筒状で緩やかなふくらみを持ち、裾部は鋭く折れて水平に取り付くものと思われる。整形は外面は縱方向の細いヘラ磨き、内面は縱方向の指によるナデが見られる。

第1号溝状遺構

遺構（第17図、写真図版14、15）

当遺構はA地区（B-8）グリッドに於いて確認された。西方より北方へ、やや弓なりに湾曲して流れ、調査区を横断している。幅は最大で220cm、最小で175cmを計る。掘り込みは二度にわたって行なわれており、1度目よりも2度目のほうが深く、最初の底部は、溝西側にテラス状に残る。深さは、確認面よりテラスまで35cm、底部まで60cmを計る。充填土層は6層に分層され、5層及び6層は、1度目に掘り込まれた溝の覆土と考えられるが、明確な違いは認められない。遺物はすべて覆土中に流れ込んだもので、土師器片、滑石等がある。しかし、当遺構に伴うと思われる遺物は検出されていない。



第17図 第1号溝・第2号溝実測図

第2号溝状造構

造構（第17図、写真図版14、15）

当造構は第5号住居址、第1号溝状造構の調査の為拡張を行なったのに伴い、第1号溝状造構には平行して走るのが確認されたものである。第1号溝状造構とは同様な形態で湾曲が

強くなる部分も同じように湾曲している。又、同様にテラスを持つ。幅は最大 135 cm、最小で 55 cm を計る。第 1 号溝状遺構と同様なテラスを持つが、同時に掘り込まれたものか、二度に分けて掘り込まれたものか、土層の堆積状態には明確にあらわれていない。充填土層は、5 層に分層され、暗褐色土を基調としている。確認面よりテラスまでの深さは 30 cm を計り、底部まで 52 cm を計る。遺物には土師器の細片が數片あるが、いずれも覆土中に流れ込んだもので、遺構に伴う遺物は検出されていない。

第 1 号土塁

遺構（第 13 図、写真図版 14、15）

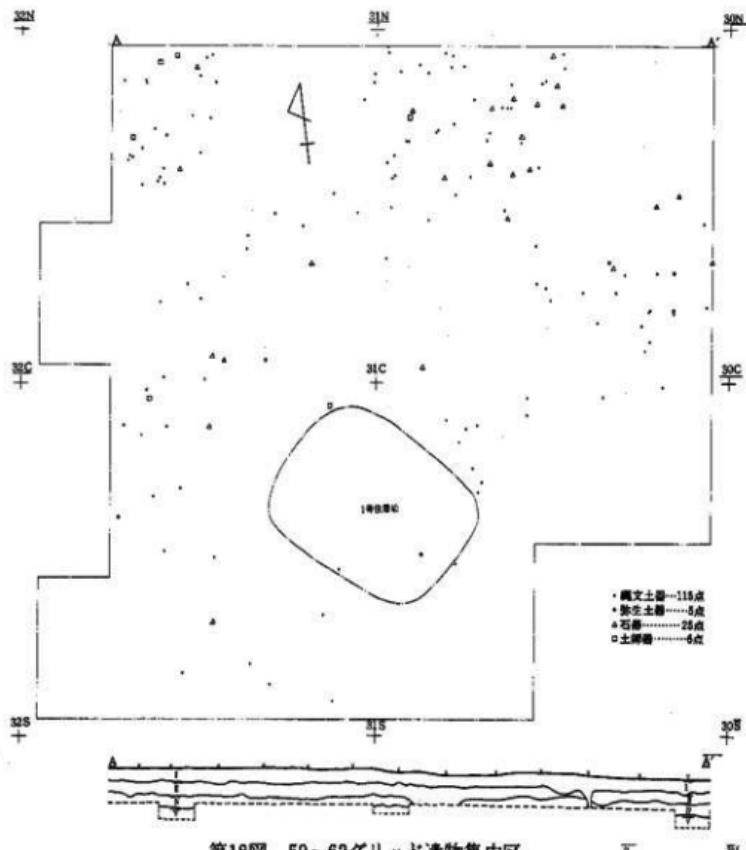
当土塁は第 6 号住居址の北西に位置し住居址コーナーと僅かに重複する。長径 112 cm × 短径 83 cm の南北に長い隋円形を呈し確認面よりの深さ 27 cm を計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底部は錐底状を呈す。充填土層は暗褐色土を基調としロームの混入量及びしまりにより 4 層に分層した。遺物は検出されていない。

第 2 号土塁

遺構（第 15 図、写真図版 15、16）

当土塁は第 7 号住居址北西コーナー付近において確認された。長径 133 cm × 短径 118 cm の南北に長い隋円形を呈す。壁はやや緩やかに立ち上がり、皿状を呈し、確認面よりの深さ 37 cm を計る。充填土層は黒色土及び暗褐色土を基調とし、ロームの混入により 4 層に分層される。遺物は検出されていない。

（大賀）



第18図 59~62グリッド遺物集中区

第2節 グリッド出土遺物

59~62グリッド遺物集中区出土縄文式土器

本地区出土の縄文式土器は、約120点余である。時期は、縄文早期の燃糸文土器から縄文中

期前半までの土器片がみられる。以下、型式別に第1類から第6類までに細別して説明したい。

第1類土器（1~11）

縄文早期の夏島式土器とその胴部破片である。（1、2）は、口縁部破片で口唇部にいく分縄

文の施文がみられ、それ以下は単節縄文が器面を飾っている。胴部破片はほとんどが縄文の施文で、撚糸文のものは（9）のみである。いずれの土器片も磨滅が著しく原体について明瞭ではないが、単節 RL のものが多い。

第2類土器（12～15）

縄文早期末の貝殻条痕文土器を本類とした。（12）は口縁部破片で、貝殻条痕文を横位に施文した後更に縱方向にも施しておる、裏面にも横方向に施文している。その他は胴部破片で、器面に貝殻条痕文のみられるもの（13・15）、無文のもの（14）がある。本類土器の特徴は、胎土中に多量の植物纖維を含むことであり、このためか器面のもういものばかりである。

第3類土器（16～20）

本類は、無文土器であるが胎土中に纖維を含むので、他の型式と分けて説明したい。これらのうち口縁部破片は（16・18・19）で、いずれの土器の口唇部も円味を帯びている。器面には、擦痕や整形痕がみられる他（20）には、裏面にも擦痕が顕著に認められる。これらの土器の色調は、ほとんど暗褐色から灰褐色で、胎土中には纖維を微量に含んでいる。焼成は普通。

本類土器は、早期中葉の田戸上層式の仲間ないしはその後続する時期に該当するものと思われる。

第4類土器（21）

本類は縄文前期の黒浜式土器である。出土点数は少なく、図示できるものは（21）のみである。図示したものは、かなり大型土器の胴部破片で横位に原体 RL を回転して施文している。色調は赤褐色、胎土中には砂粒の他多量の植物纖維を含んでいる。焼成は良好で、裏面もていねいに研磨されている。

第5類土器（22～25）

縄文前期終末の十三菩提式土器である。同一破片が他に出土しているが、その量は少ない。口唇部がいく分内削ぎ状となり、口縁部には、貼り付けた粘土を連続した三角形の刻みがみられる。頭部から胴部は平行の条線文が横位や山形状に連続する。頭部にみられる平行条線の上端は、条線の施文後三角形の刻みによってつぶされていることが明らかである。色調は灰褐色、胎土中には小砾、砂粒を含んでいる。焼成の良好な土器である。

第6類土器（26～27）

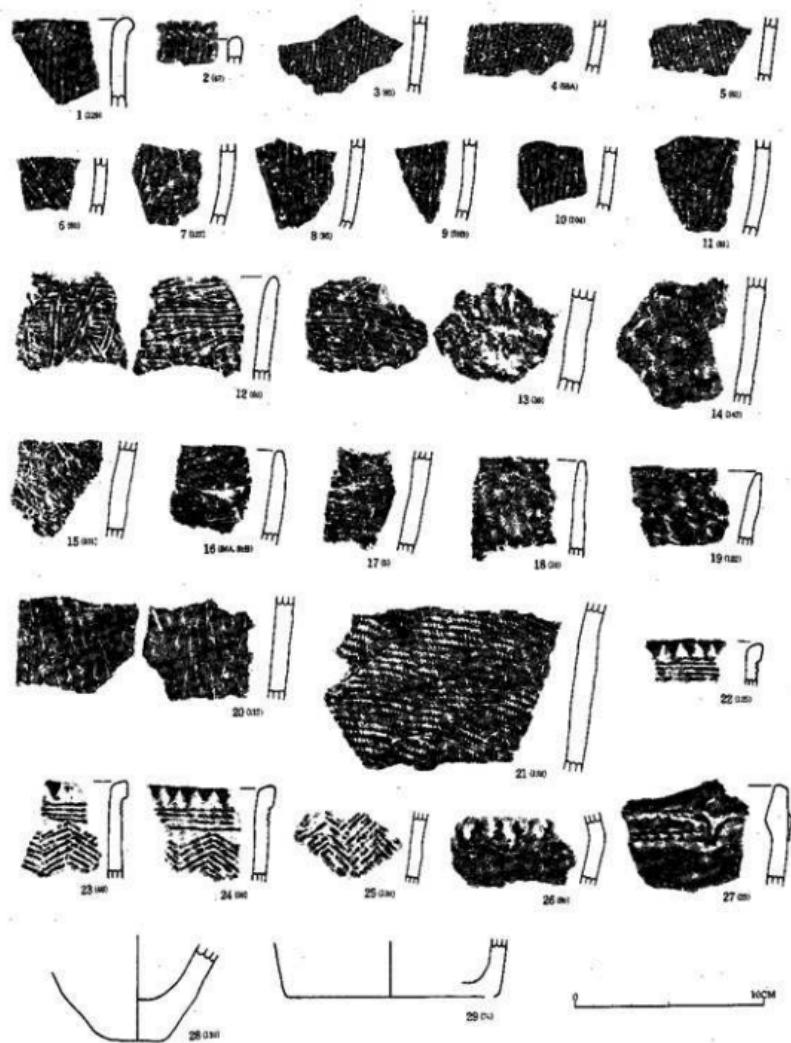
本類は、縄文中期前半の阿玉台式土器である。この土器は、他の土器と異り胎土中に金雲母を多量に含んでいる。図示した拓影のうち（26）は、胴部の粘土紐の接合箇所を爪形文をもつものと、口縁部が波状で内側に阿玉台式土器特有の棱をもつもの（27）がある。いずれも焼成の良い土器である。

底 部

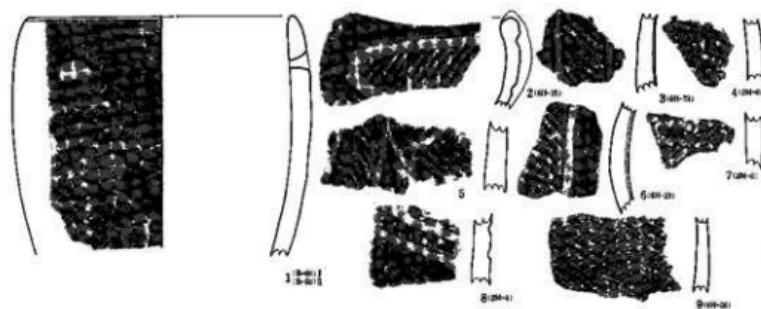
縄文式土器の底部は、5～6点の出土がある。実測可能な2点について図示した。（28）は、

尖底土器の底部で、若干底が平になりつつある状態といえる。文様は、若干条痕文がみられる程度である。色調は暗褐色、胎土中には植物纖維の混入する他、砂粒の混入も認められる。焼成は普通。なお、底部の底は磨減が著しい。茅山上層式の底部であろう。

(29) は、阿玉台式土器の底部である。底部近くのため文様はみられない。胎土中に、石英、小礫、金雲母を多量に含んでおり、一別して阿玉台式土器であることがわかる。焼成の良好な土器である。

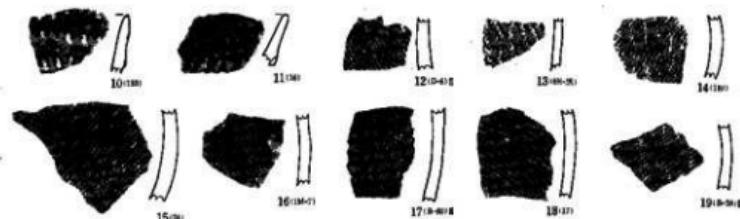


第19図 59~62グリッド遺物集中区出土繩文式土器実測図・拓影図



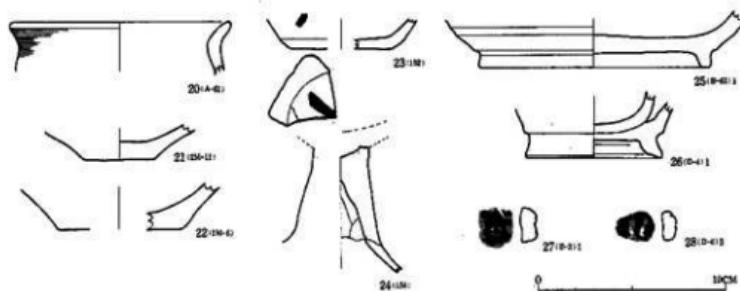
第20図 グリッド内縄文式土器実測・拓影図

0 10CM

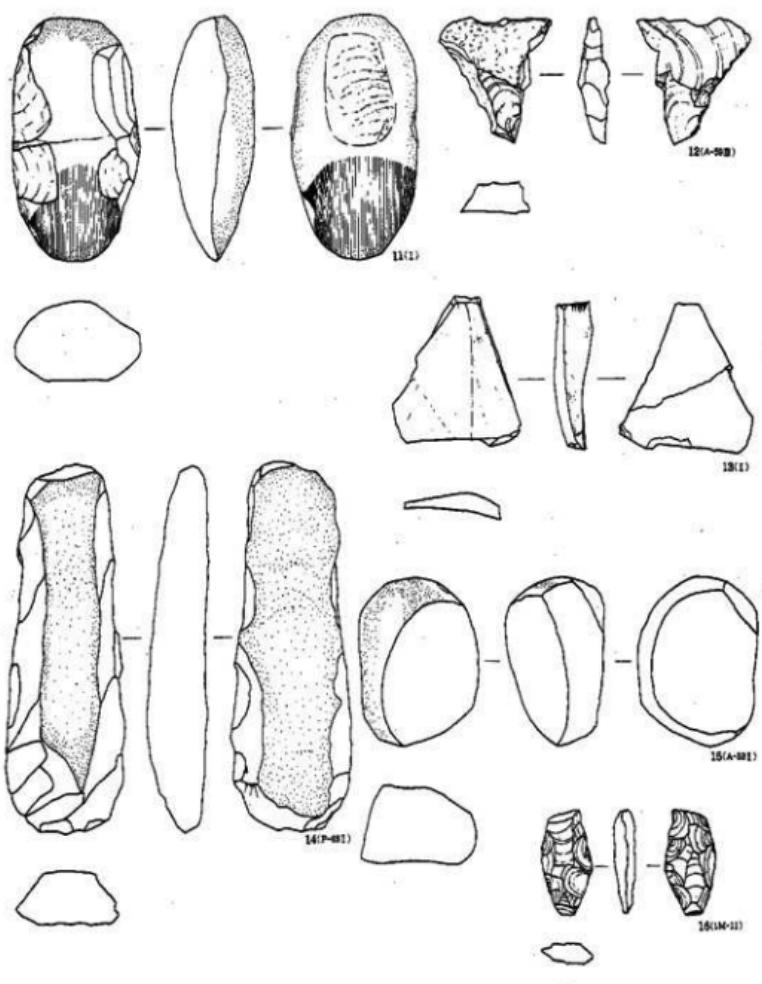


第21図 グリッド内弥生式土器実測・拓影図

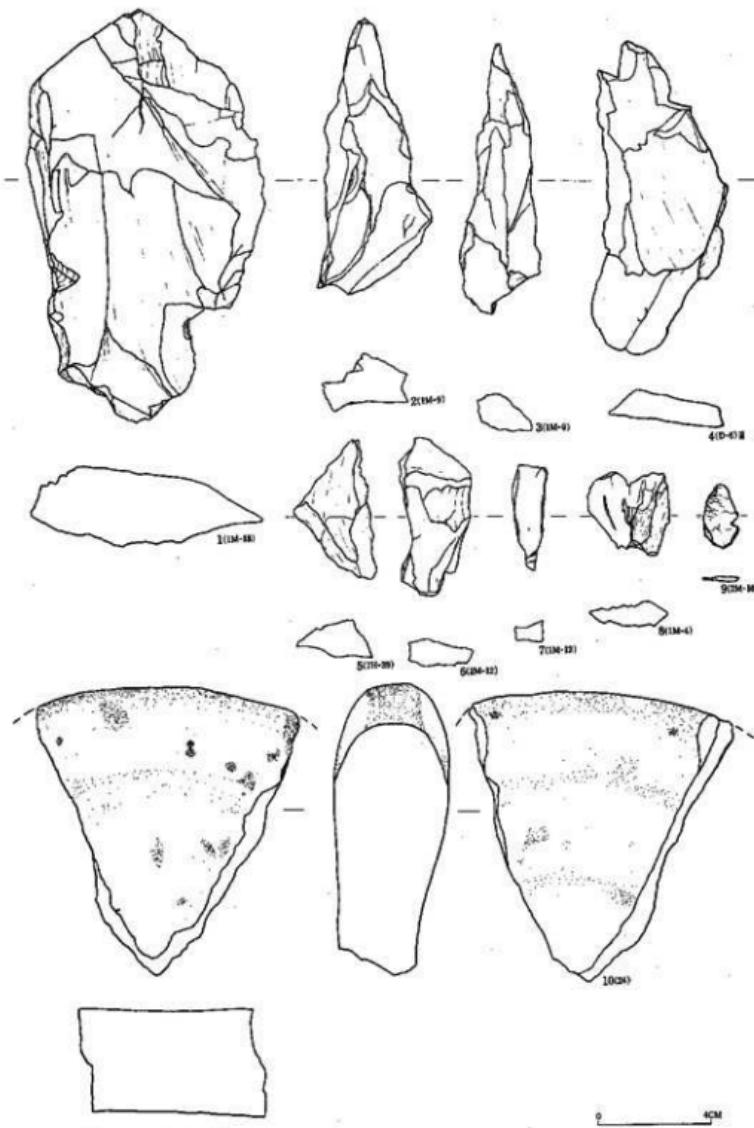
0 10CM



第22図 グリッド内その他の遺物実測・拓影図



第23図 遺跡内出土石器実測図(1)



第24図 遺跡内出土石器実測図(2)

グリッド内出土縄文式土器（第20図、写真図版30）

59～62グリッド外の調査区内に於いても少量の縄文式土器が出土している。遺構に伴う遺物は無くすべてⅠ層若しくはⅡ層より出土している。時期的には早期から後期まで見られる。1は早期で尖底土器の口縁から胴部にかけての大形破片である。補修孔が見られ、これは焼成後の穿孔である。2～7は中期後半、8～9は後期に比定される土器である。

グリッド内出土弥生式土器（第21図、写真図版30）

ほとんどの遺物が59～62グリッドに集中して出土しており、第1号住居址の確認面及びその周辺より出土している。その他のグリッドから出土した破片は僅か3片のみであった。時期的にも第1号住居址とはほぼ平行の弥生後期前半より中頃にかけてのものである。器形には妻形土器と壺形土器がある。

グリッド内出土その他遺物（第22図、写真図版31・32・33）

古墳時代に伴う遺物としては妻形土器（20～22）の他に高杯形土器24が見られる。時期的には（20）がやや新しく鬼高時に伴うと思われるが、他は和泉期に伴うものであり第5号・第6号・第7号住居址と同一時期に比定されるであろう。

平安時代の遺物としては（23）（25）（26）があげられる。（23）は杯形土器で外面体部及び底部に墨書きが見られるがいずれも判読不可能である（25）は須恵器の高台付杯形土器の破片である。焼成は良好とはいえず、砂粒を多く含む。（26）は特殊遺物で器形としては円面鏡形土器であるが、台部に透し等は見られず、又鏡として使用した痕跡は見られない。

その他時期的には新しくなるが、近世の土製品（27）（28）が見られる。（27）は獅子の面で（28）は狐の面である。（27）が狛犬を模倣していて、（28）が狐を模倣している事は、宗教的背景を考えさせる。

グリッド内出土石器（第23・24図、写真図版32・33）

59～62グリッドの縄文式土器に混入して打製石斧が出土している。又第1号溝状遺構覆土中より滑石の原石及びナイフ形石器が出土している。

第4章 小 括

調査の結果竪穴式住居址 7軒、土塙 2基、溝 2本を検出した。以下遺構及び遺物について若干の整理を行ない検討したい。

弥生時代の遺構と遺物

住居址 7軒の中で弥生式土器を伴う住居址を 4 軒（第 1 号・第 2 号・第 3 号・第 4 号）検出した。これらの住居址のプランはいずれも隅丸方形を呈し、第 3 号住居址を除く他の住居址はいずれも炉址を設置しており、柱穴は対角線上に 4 個位置する形態を呈す。出土遺物は量的に極めて少なく複元・実測でその器形を完全に知る事のできるものは無い。土器の器種は變形土器・壺形土器・高杯形土器が見られた圧倒的に變形土器が多い。

變形土器の文様構成は、口縁部及び頸部に輪積みの痕を残すものと横ナデを施すのみで無文帯を示すものの二種がある。又、口唇部に指による波状の刻目をもつものと繩文原体の压痕による刻目を施しているものがある。頸下部より胴部は繩文が施されているものが圧倒的に多く確認されている。また無文のものも見られる。

これらの土器の形態と文様構成から見て、所謂弥生時代後期に属する印旛・手賀沼系土器（註1）と考えられるが、第 4 号住居址内出土の壺形土器胴部片（第 9 図.3）は久々原式土器に特徴的な鋸歯状の区画文が見られ若干相異する点もあるようである。

以上検出した 4 軒の住居址の時期は第 1 号・第 4 号住居址併に弥生時代後期に属するものと考えられる。尚、第 2 号・第 3 号住居址は伴出遺物が土器細片である為時期決定はできないが住居址の形態や構造から見て第 1 号・第 4 号と同時期と推定される。

古墳時代に伴う遺構と遺物

土師器を伴う住居址を 3 軒（第 5 号・第 6 号・第 7 号）検出した。住居址の平面形はいずれも方形を呈するが形態及び構造上で差異が見られる。住居址として認定される基準は柱穴・貯蔵穴・炉穴・壁溝等の付帯設備を有するか否かにあるが、第 5 号住居址では床面が軟弱で炉址等の付帯設備をいっさい持たない。又、出土遺物も覆土中に集中しており、床面からは検出されていない。第 7 号住居址も第 5 住居址と同様に床面が軟弱ですべての付帯設備を有しない。がしかし、遺物は床面より壺・高杯・鉢・變形土器等が出土している。これらの事から考え、第 5 号・第 7 号住居址は遺構の構造上から見て住居址と即断し難いが、住居址としての使用期間が短く何らかの変化による集落の移動が行なわれて、それに伴ない廃棄されたものと考え、こでは一応住居址として取り扱った。

第 6 号住居址は火災を受けており、柱穴、炉址、壁溝、貯蔵穴併に明確であり、床面及び炉址の状況より長期に渡って生活が営なされていたことが窺える。当住居址に於いて南東コーナー付近に漸斗状のピット（P-6）が検出されている。これは同住居址北東コーナー付近に於

いて床着で出土した滑石剝片50点と考えあわせると、このP-6は工作用ピット的性格が考えられたが、ピット内充填土層に灰白色の粒土状を呈す埴糞等は確認されておらず、又住居址内床面から生産対象物である滑石製模造品の完成品及びその未成品が検出されておらず、穿孔の為の工具及び砥石・軽石等も検出されていない事より工房址とは断定し難く、工房とは関係無く何らかの目的で滑石の剝片が住居内に持ち込まれたと考えるのが無理がないであろう。しかし、第5号住居址覆土中に流れ込んでいる多量の滑石製模造品の完成品及び未完成品等を見ても周辺に滑石製模造品の工房址が存在することは充分想定される。

以上、古墳時代に伴う遺構及び遺物について若干の検討を試みたが、検出した第5号・第6号・第7号住居址の3軒はいずれも古墳時代（和泉期）に属するものと推定される。

註1 千葉県文化財センター研究記要3「弥生時代」の中において提唱される。

(平岡)

印手賀式土器を踏襲するものである。

参考文献

千葉県文化財センター研究紀要3 財団法人千葉県文化財センター

村田一男『おおびた遺跡』八千代市教育委員会

栗本佳弘『京葉』千葉県都市公社

栗本佳弘『成田市東和田遺跡』『埋蔵文化財調査報告』所収

八幡一郎他『外原』船橋市教育委員会

玉口時雄他『宮脇』宮脇遺跡調査団

栗本佳弘他『千葉市上ノ台遺跡』財団法人千葉県都市公社

寺村光晴『下総国の大玉作遺跡』千葉県教育委員会

写 真 図 版

図版 1

遺跡航空写真

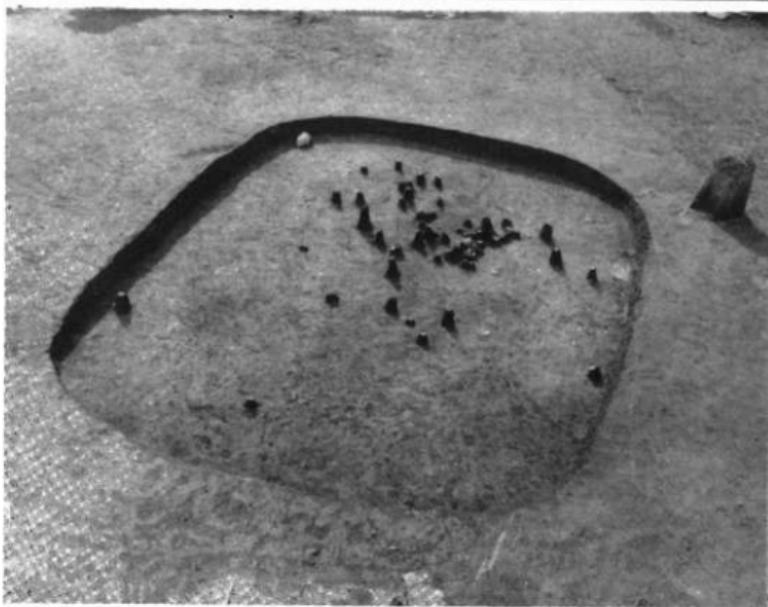
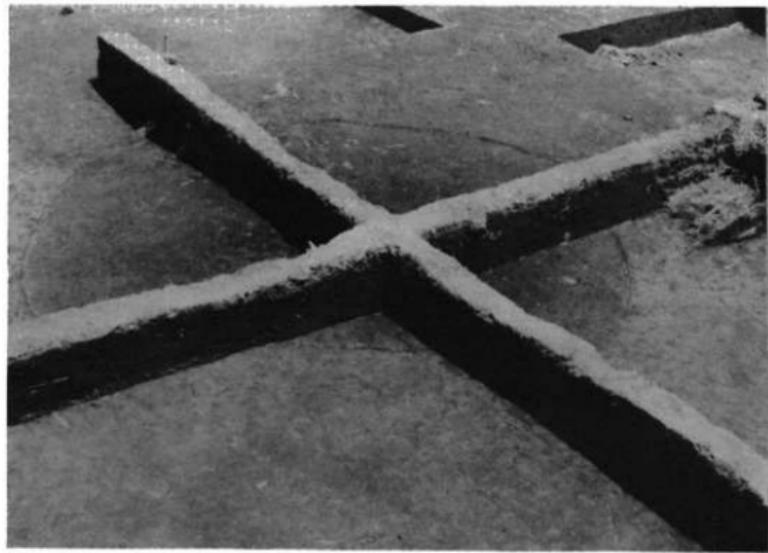


図版 2

遺跡写真

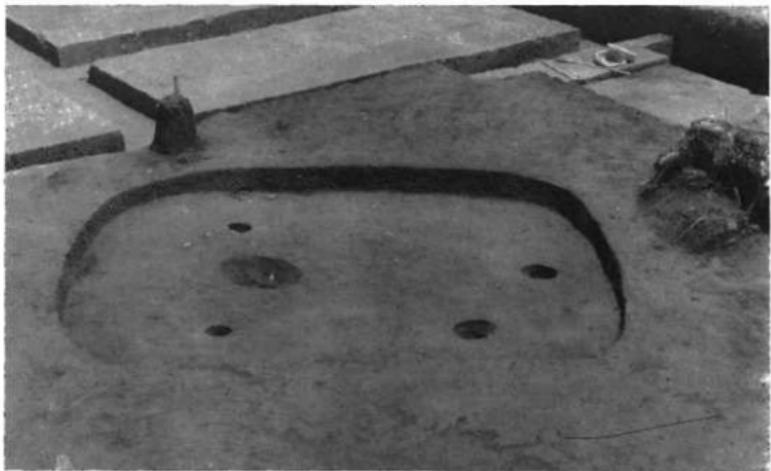


調査前状況 グリッド設定状況



第1号住居址

遺構写真



第 1 号住居址

図版 5

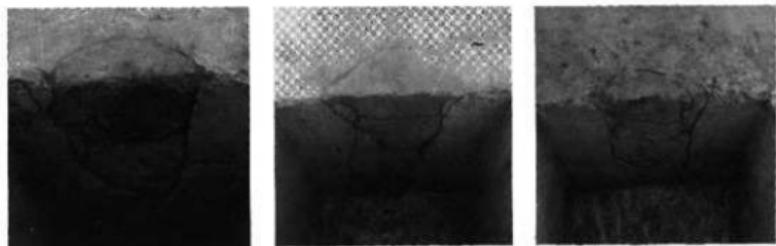
遺構写真



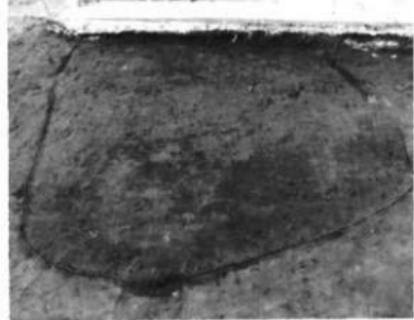
第 2 号住居址

図版 6

遺構写真



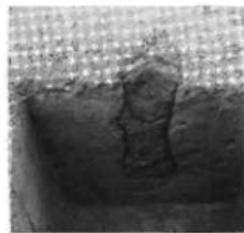
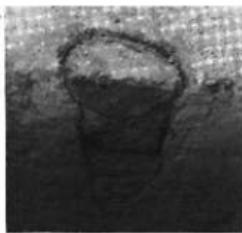
上、第 2 号住居址柱穴
断面



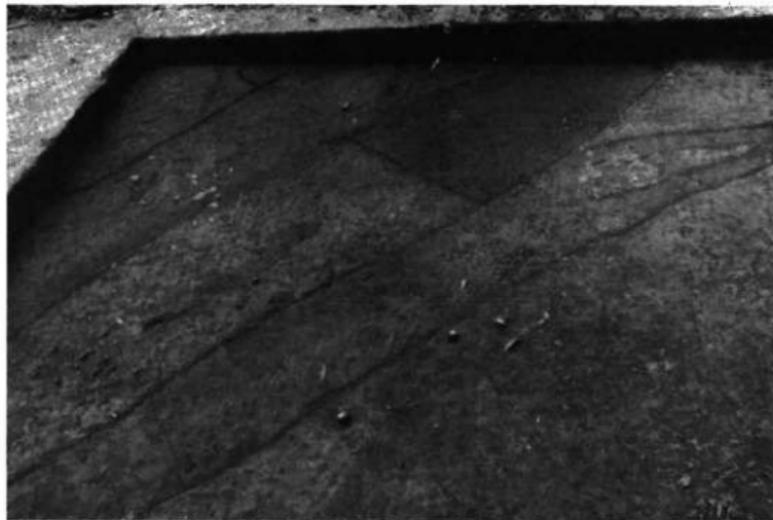
第 3 号住居址



第4号住居址



第4号住居址



第 5 号住居址

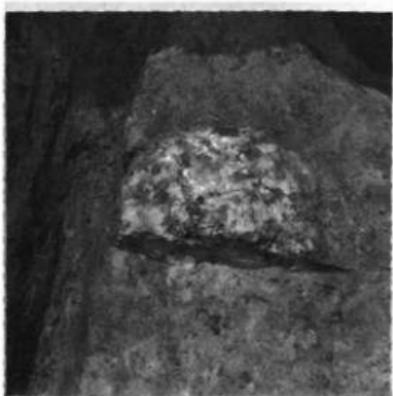
図版 10

遺構写真



第 5 号住居址

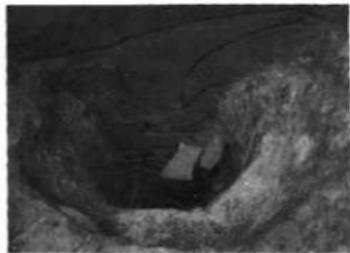
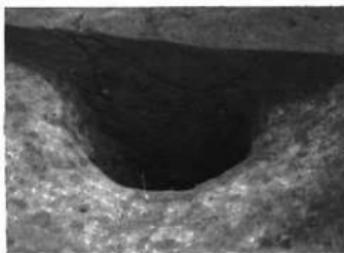
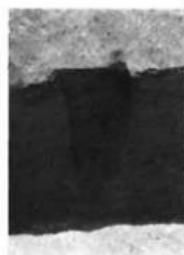
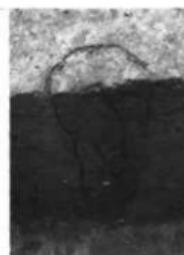
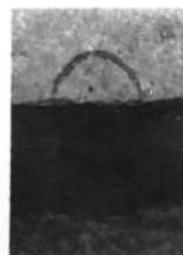
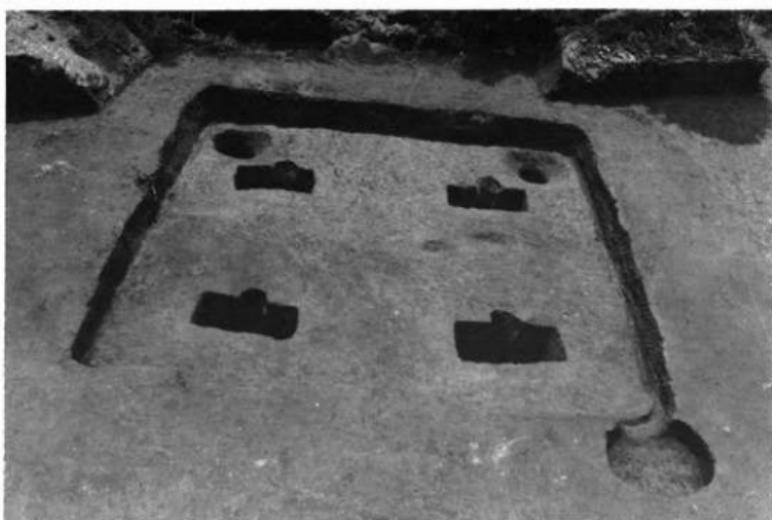
造
構
写
真



第 6 号住居址

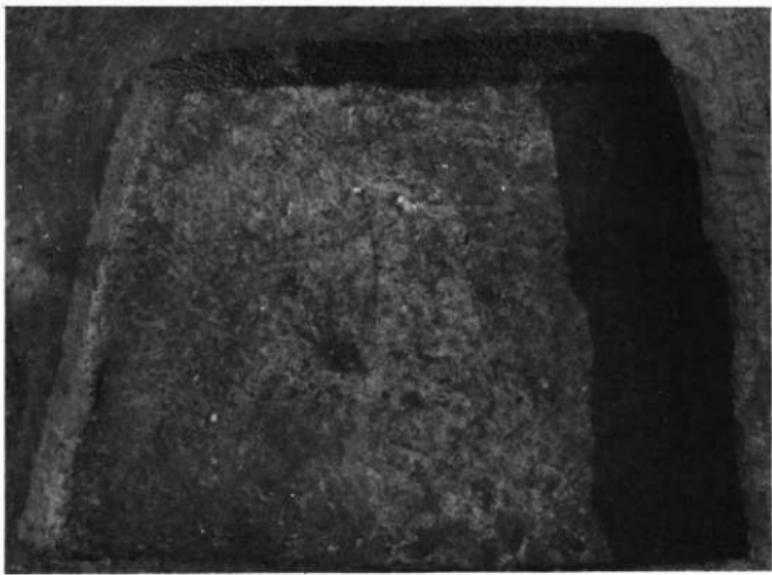
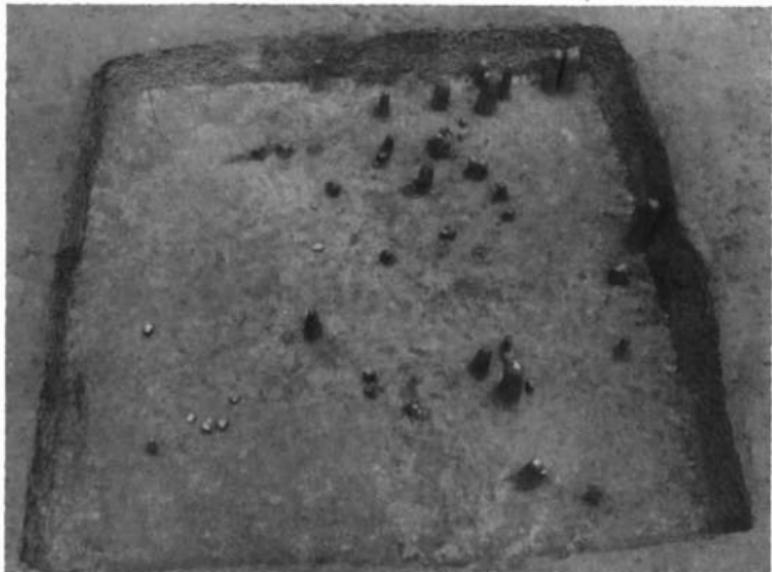
図版 12

遺構写真



第 6 号住居址

遺構写真



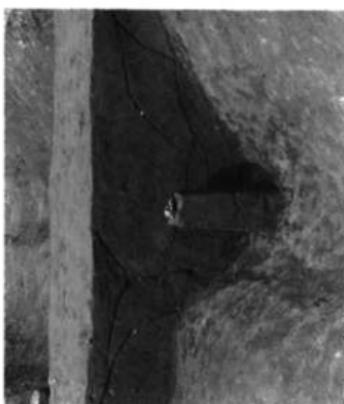
第 7 号住居址

図版 14

遺構写真



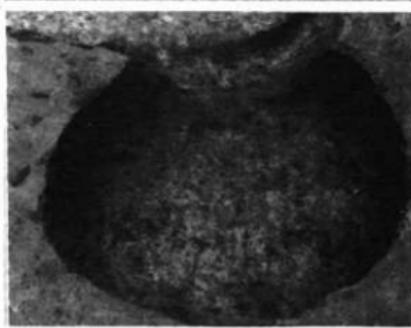
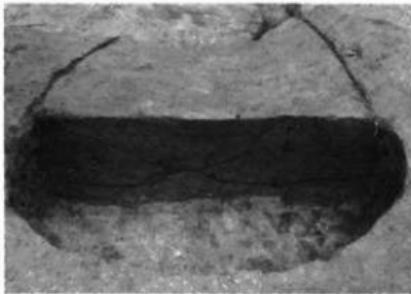
溝状遺構



遺構写真



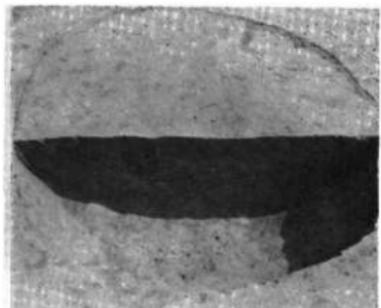
上、第5.6.7号各住居址
第1.2号溝状遺構
第1.2号土塁



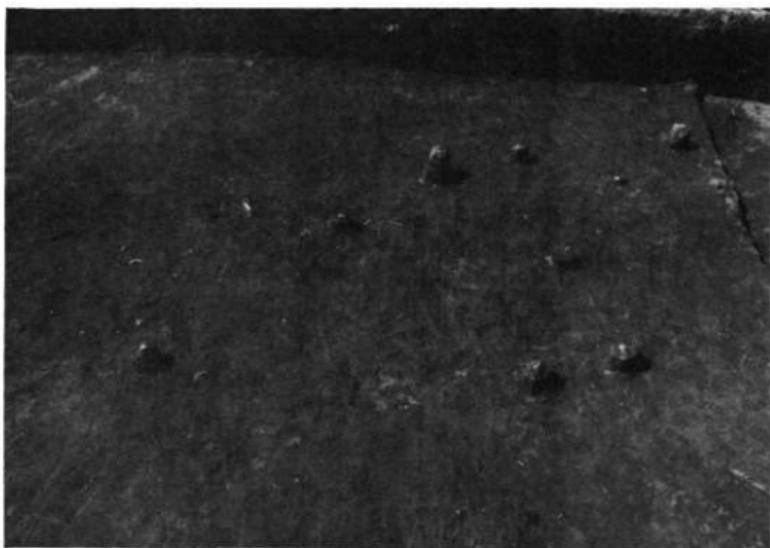
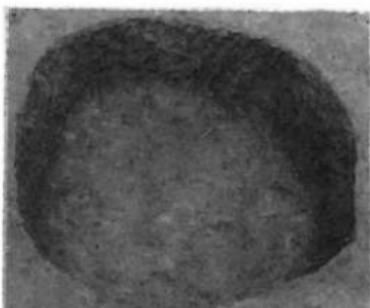
第1号土塁

図版 16

遺構写真

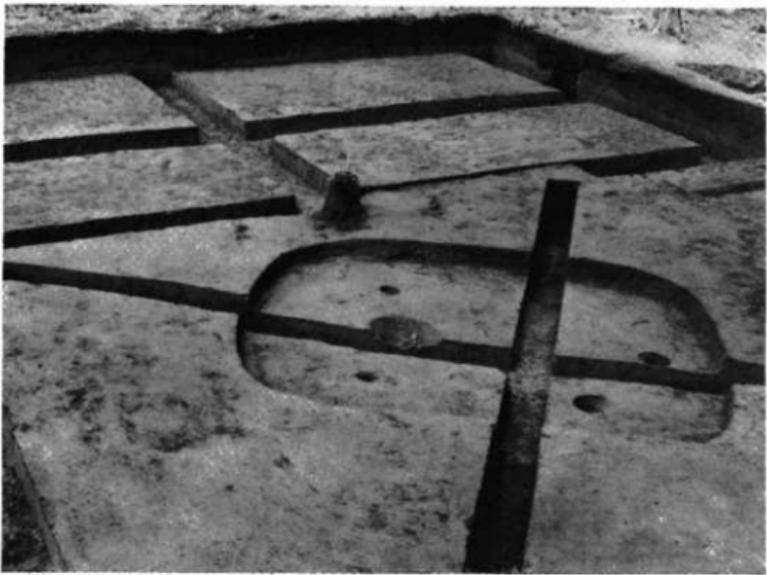


第2号土塙



59~62グリッド遺物集中区

遺構写真



59~62グリッド遺物集中区